

令和元年度（2019 年度）

郷土教育推進研究報告書

「郷土日野」指導事例

～ 第14集 ～



日野市立教育センター
郷土教育推進研究委員会

～ 目 次 ～

第 14 集の発刊にあたって	1
日野市立教育センター所長 正留久巳	
「これからの郷土教育は学校と地域のコラボレーション」	2
郷土教育推進研究委員会委員長 猿田恵一(旭が丘小学校長)	
I 研究の概要	3
1 活動の目標	
2 郷土教育が育む児童・生徒像	
3 主な活動	
4 『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用	
II 研究組織	4
III 研究の内容	5
1 各グループの研究	5
2 実践事例	7
3 各委員へのアンケート【成果と課題】	26
IV 教育センターの活動	31
1 夏季研修会(平山地域のフィールドワーク)	
2 若手教員(一年次)育成研修への協力	
3 平山陸稲の栽培体験	
4 農業振興課との連携	
5 1 課 4 館との連携	
V 令和元年度；研究の成果と課題	47
VI 「郷土教育への期待」指導主事；上国料 一志	48
《教育長のコラム》 ～ 郷土教育の風 ～	49
編集後記 郷土教育推進研究委員会副委員長 秋田克己(旭が丘小学校副校長)	49
奥付	

第 14 集の発刊にあたって

日野市立教育センター所長 正 留 久 巳

日野市では、第3次日野市学校教育基本構想がスタートし1年になろうとしています。基本構想の中に、「一律一斉の学びから自分に合った多様な学びと学び方へ」とあります。これは「一律一斉の指導から脱却し、一人一人をとらえたその子に望ましい指導をし、教材を工夫し、学習活動を通して子供たちが、学び方を身につけられる授業をつくっていかう」ということです。子供たちが、主体的な学びを獲得していくことは未来に向け必要な資質です。「なぜだろう。どうしてだろう。」という視点を大切にした学びでもあります。国際社会で生きるための力は、自分たちのよって立つ基盤を認識し、身近な地域の中から学び、そこを土台として思考を広げることによって育ちます。「郷土教育」は、郷土の一員としての自覚と、積極的に社会に参画しようとする態度を身に付けた児童・生徒の育成を目指した、アイデンティティの確立を涵養する重要な分野であります。

郷土教育推進研究委員会では、平成30年度は、念願の『歩こう 調べよう ふるさと七生』の冊子を刊行しました。(そのために指導事例集を休刊としました)令和元年度は、『歩こう 調べよう ふるさと七生』の冊子を活用し、様々な活動を創出することができました。授業づくりの研究、平山陸稲の栽培の教材化や体験学習など、様々な活動に繋がりました。特に、生涯学習課、図書館、中央公民館、郷土資料館、新選組のふるさと歴史館との連携は広がりのある取り組みとなり、子供たちの学びの活動の場を大きく広げることができました。

ここに、令和元年度、教育センターの郷土教育推進研究委員会（旭が丘小学校長 猿田 恵一委員長）がとりまとめ編集した『「郷土日野」指導事例集第14集』を発行することとなりました。本研究は日野の歴史、自然、文化、産業、人物などを教材化することにより、ふるさと日野に誇りと愛着をもった子供を育てようとするもので、十数年続いている日野の教育の特色でもあります。本事例集は、第3次日野市学校教育基本構想の具現化のために特に子供たちの主体的な学習活動の在り方を研究したものとなっています。七生の冊子とともに活用されることを願っています。

最後に、郷土教育推進研究委員会に参加してご努力いただいた現場の先生方はじめ、各委員の皆様、そして子供たちのために様々な連携をしていただいた生涯学習課、図書館、中央公民館、郷土資料館、新選組のふるさと歴史館に深く感謝申し上げます。

これからの郷土教育は学校と地域のコラボレーション

郷土教育推進研究委員会委員長
(日野市立旭が丘小学校長)
猿田 恵一

『日野市 未来に向けた学びと育ちの基本構想』には、キーワード『地活』として、地域に貢献する子供の姿を描いている。教育において目指す児童・生徒の姿は「郷土を愛し、夢と意欲を持ち未来を切り拓く人」である。学校教育において郷土愛の観点が今後ますます重要となってくるだろう。

学校教育には「郷土学習」の観点はあるが、単に知識を習得するというだけでは、郷土愛は育まれない。実は学校教育において郷土愛を育むというのは、難しいことである。郷土に生まれ育った人が教師になって子供を指導しているわけではない。他の地域から縁あって、なにも知らない日野の地に赴任し、子供たちの前に立つというケースがほとんどである。さらに今の学校には「郷土愛」を育むための教科・科目がない。

様々な教科や学校生活の中で郷土愛を育むことが求められているのである。先生方はきわめて多忙である。教科の指導に加えてさらに郷土愛も…となると疲れ果ててしまう。そもそも〇〇愛とは本来、心の中から自然とわき上がるものである。多忙な先生方が教える「郷土愛」は、ややもすると知識偏重のものとなってしまうだろう。だからといって、先生方の負担を減らすために教育において郷土愛の視点を削ることはできない。

郷土愛を育むのは学校でなくともよいのでは、という意見もある。これについては、郷土資料館をはじめとする社会教育の機関が様々な展示・講座等を開催し、そこに参加し学ぶ児童・生徒、さらに市民の方々にはかなりの成果を上げている。一方、子供たちの学ぶべき場所は学校であり、学校において郷土愛を育むことは学校における大切な役割であると言わざるを得ない。

その学校は社会から離れたところで運営されている。先生方は、子供たちの学びと育ちに関して、あまりにも大きな任務と責任を負っている。かつて地域社会も学校と同様に、あるいはそれ以上に子供を育てる役割を担っていたはずである。地域社会と子供たちとの関わりが薄れ、子どもたちの教育機能が学校現場に集中してしまった。先生方だけで運営しようというのだから、無理が生じるのは当然のことである。

郷土教育、郷土愛の育成は学校がやるしかないだろう。そしてその解決方法は、地域とのコラボレーション、地域の環境と人材の活用である。先生方の専門性と地域との関わりの中で生まれる郷土愛、地域愛を育てる環境を融合させ、子供たちを委ねるのである。

先生たちは、国語とか社会といった教科の中で、郷土愛を養う必要がある。しかし、それらの教科だけで完結させることはできない。〇〇愛というのは、知識ではなく心である。心は動かされ、揺さぶられることで育まれる。人と人とがつながること、営みを共有することで、子供たちは心を動かされ、〇〇愛が醸成されるのである。つまりは、郷土に生きること、生きていくと実感することが郷土愛を育むのである。日野の地に生まれ育ち、日野をふるさとと感じながら教職に就いてきた私は『郷土愛の育成は学校と地域のコラボレーションの中でこそ大きな成果が期待できる。』と思っている。

今年度、郷土教育推進研究委員会においては、「歩こう 調べよう ふるさと七生」を活用した道徳・社会科をはじめとした様々な教科・領域における授業提案を行った。いずれも教師の創造性と子供たちの意欲の喚起に効果を上げ、児童・生徒の主体的な学びのもと郷土に対する愛着と、地域に生きる喜びや誇りを育成することができた。またさらに、地域の方々の、郷土に対する愛着と探求心をかき立てることにもつながっている。今後さらに活用の実践を重ね、その効果を検証し、郷土愛を育成する場面で先生方の活用につながる実践事例を提案していきたいと考えている。

今年度の研究にあたり、各小学校から1名ずつ意欲的な先生方を推薦していただいた小学校長会、研究をサポートしていただいた郷土資料館の皆様、研究に関心を寄せ、貴重なご意見やご要望をお寄せくださった市民の皆様、この場をお借りして深く感謝したい。

先生方が郷土・日野に関心を持ち、様々な話題を掘り起こし教材化し、授業を実践し、子供たちが生き生きと学び自らの学びに発展していく姿を見ることは大きな喜びであった。

今後のますますの研究の深まりと先生方、子供たちの学びの発展を期待している。皆様の今後のご指導ご支援をお願いしたい。

I 研究の概要

1 活動の目標

ふるさと日野に誇りと愛情をもち、郷土の一員としての自覚と、積極的に社会に参画しようとする態度を身に付けた児童・生徒の育成。

2 郷土教育が育む児童・生徒像

- ① 郷土に関する歴史上の人物、事物、出来事、伝統や文化、産業、人々の暮らし等を知り、ふるさとに対する愛着と感謝の心を高めている。
- ② 主体的に問題発見や問題解決に取り組み、仲間と協働して探究的に活動している。
- ③ 学びを通じて、地域社会の一員としての自覚をもち、自らの生き方を考えている。

3 主な活動

- ① 郷土教育推進研究委員会による授業づくりの実践的研究
研究主題；郷土への愛着をもち、自己の生き方を見つめる児童の育成
～『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用を通して～
- ② 郷土教育に関する授業力向上のための研修会の実施
- ③ 平山陸稲の栽培体験
- ④ 1課4館（生涯学習課、郷土資料館、図書館、中央公民館、新選組のふるさと歴史館）との連携の充実

4 『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用 〔冊子のづくり〕

- ① 古代から現代までの七生地域の歴史を 22 のテーマで綴る。
- ② 郷土の「人・もの・こと」について興味・関心を高める。
- ③ 「なぜ」「どうして」などの問いを生む。

〔冊子の活用〕 郷土教育推進研究委員会による授業づくりの実践的研究、平山陸稲の栽培体験及び1課4館との連携において七生の冊子を活用した取り組みを行った。

〔冊子の改訂〕 令和2年度に新3年生へ配布する「第2版」の改訂作業を行った。



七生冊子の表紙

Ⅱ 研究組織

委員長；猿田恵一（旭が丘小学校長）

副委員長；秋田克己（旭が丘小学校副校長）

指導主事；上国料一志

顧問；會田 満（元常盤松小学校長）、吉野美智子（元百草台小学校長）

小杉博司（元日野第一小学校長）、高橋清吾（日野第一中学校統括校長）

〔委員〕

A グループ

- 1 渡辺亮俊（日野第一小学校教諭）
- 2 町田 禎（日野第四小学校教諭）
- 3 中野 健（日野第七小学校主任教諭）
- 4 細島由美子（東光寺小学校主任教諭）
- 5 久保田聡（仲田小学校主任教諭）
- 6 白川未来（郷土資料館学芸員）

B グループ

- 7 高橋 誠（豊田小学校主任教諭）
- 8 石井浩由（日野第三小学校教諭）
- 9 村井香奈実（日野第五小学校教諭）
- 10 島谷直樹（日野第六小学校教諭）
- 11 高橋秀之（新選組のふるさと歴史館学芸員）

C グループ

- 12 中島康治（潤徳小学校教諭）
- 13 三島寛之（日野第八小学校教諭）
- 14 永吉智洋（夢が丘小学校教諭）
- 15 大久保有紀（七生緑小学校教諭）
- 16 山口裕衣（中央図書館司書）

D グループ

- 17 渥海知子（第七幼稚園主査幼稚園教諭）
- 18 澤久保敦（平山小学校教諭）
- 19 谷 隆也（滝合小学校教諭）
- 20 荒木 龍（南平小学校主任教諭）
- 21 尾崎恒平（旭が丘小学校主任教諭）
- 22 幕田淳子（生涯学習課学芸員）

教育センター

所長；正留久巳 所員；中村康成、清野利明

事務局；菅野雅巳事務長、宮澤功一係長

Ⅲ 研究の内容

1 各グループの研究

【A グループ】

〔メンバー〕 渡辺亮俊（日野第一小学校）、町田 禎（日野第四小学校）、中野 健（日野第七小学校）、細島由美子（東光寺小学校）、久保田聡（仲田小学校）、白川未来（郷土資料館）。 顧問；高橋清吾（日野第一中学統括校長）

『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用

- ・ 5年総合的な学習「お米について調べよう」七小；中野
～日野市においても農業や自然を大切にしようと努力した人々が多くいることを知ること、地域への愛着を深めさせる実践。
- ・ 3年社会「農家の仕事」東光寺小；細島
～日野市内の農家の人々が、昔も今も工夫と努力を重ねながら地域で働いていることを学ぶ実践。
- ・ 4年総合的な学習「どんどんつながる・ひろがる」仲田小；久保田
～七生地域が、多摩都市モノレールとともに、他地域とつながりながら発展していくことを、資料から読み取り、考えさせる実践。
- ・ 4年道徳「ねがいをつみ上げた石橋」四小；町田
～校歌の作詞をした巽聖歌と、身近にある日野橋から郷土愛を実感させる実践。

〔研究の成果〕

『歩こう 調べよう ふるさと七生』を活用し、日野市の身近な文化や施設と結びつけることで…（陸稲、多摩都市モノレール、日野橋）⇒児童の興味・関心の高まり⇒実感を伴った理解



台風 19 号で破損した日野橋を教材に

〔研究の課題〕

- ・ その学年の本来の学習目標と時配に照らし合わせた七生の冊子の活用
⇒教科書との兼ね合い ⇒学年間の活用の連携
- ・ 対象学年に合わせて、七生の冊子の内容をどう分かりやすく伝えるか。（下学年には七生の冊子は、読み取り難い）⇒他の資料で補完する、実物を見せる、ゲストティーチャーを呼ぶ、七生の冊子の内容を再構成した資料を自作して示す、など。

【B グループ】

〔メンバー〕 高橋 誠（豊田小学校）、石井浩由（日野第三小学校）、村井香奈実（日野第五小学校）、島谷直樹（日野第六小学校）、高橋秀之（新選組のふるさと歴史館）。 顧問；小杉博司（元日野第一小学校長）

〔発表〕 三小 6 年。教科；社会科。単元名「戦争と人々の暮らし」。三小；石井浩由「戦争」についてより明確なイメージ ← 冊子を活用して。児童が「戦争」をより身近に捉え、戦争についての鮮明なイメージをもたせたいと考え授業作りをした。日野市にも空襲の被害があったことや、日野市に疎開をしてきた子供たちの写真を活用することで、児童が「戦争」について身近に捉えるきっかけになると考えた。

〔研究の成果〕

- ・ 自分たちの住む地域の資料を活用することで、身近に「戦争」というものを捉えさせることができた。
- ・ 七生地域ではない学校であっても、児童の身近に感じる資料であった。

〔研究の課題〕

- ・ 教師が資料を提示する形でなく、児童自らが冊子を手に取り調べることで、より児童の考えが深まったのではないか。
- ・ 児童の予想や考えを資料等で確認、調べる時間が取れなかった。

【C グループ】

〔メンバー〕中島康治（潤徳小学校）、三島寛之（日野第八小学校）、永吉智洋（夢が丘小学校）、大久保有紀（七生緑小学校）、山口裕衣（中央図書館）。

顧問；吉野美智子（元百草台小学校長）。

学習をより効果的に進める「資料」として活用

～第3学年の実践事例

- ① 社会科見学の事前指導資料として活用「社会；日野市で働く人びと」潤徳小；中島
- ② 夏休み自由研究事前指導に活用 「夏の自由研究」に向けて 夢が丘小学校；永吉

〔研究の成果〕

- ・ 学習活動に関連させ活用することで、より地域を学ぶ機会が得られた。
- ・ 保護者にも働きかけ、取り組んだ。

〔研究の課題〕

- ・ 学習内容と冊子の関連性をどう築くか。
- ・ いかに保護者、地域の協力を得るか。

【D グループ】

〔メンバー〕渥海知子（第七幼稚園）、澤久保敦（平山小学校）、谷隆也（滝合小学校）、荒木龍（南平小学校）、尾崎恒平（旭が丘小学校）、幕田淳子（生涯学習課）。

顧問；會田満（元渋谷区立常盤松小学校長）。

〔発表〕尾崎恒平。旭が丘小学校4年。教科；道徳科。

〔主題ほか〕

- ・ 市内に住んでいた詩人「巽聖歌」を取り上げ、聖歌の故郷への愛を想像し、考える道徳の授業を作る。
- ・ 主題「故郷への思い」、内容項目「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」

授業の実践報告（1）

- ・ 七生の冊子の「巽聖歌の項」を活用する。
- ・ 巽聖歌の伝記を自作し、読み聞かせる。

授業の実践報告（2）

- ・ 詩から分かる巽聖歌の故郷への愛を読み取る。
- ・ 巽聖歌の思いを想像し発表する。

〔研究の成果〕

- ・ 巽聖歌は日野にゆかりがあるので、共感させやすかった。
- ・ 詩を紹介することで、巽聖歌の故郷への思いを想像させることができた。

〔研究の課題〕

- ・ 日野市の良さを考える時間が少なく、もっと具体的な良さを考えさせられるとよかった。
- ・ 巽聖歌の日野市のことを歌った詩を紹介したいが、数が少ない。

2 実践事例

童謡『たきび』の作詞者 異聖歌と旭が丘地域のつながりを知る

日野市立第七幼稚園 渥海知子 5歳児担任

1 教材化の意図

園では様々な歌に親しむ機会を設け、子供たちがリズムの楽しさを感じたり、詩の世界を想像したりしながら心豊かに感じ、表現する楽しさを味わうことを大切にしている。特に昔から親しまれている歌（童謡など）は季節を感じさせるものが多くあり、教材として意図的・計画的に活用している。

『歩こう 調べよう ふるさと七生』を開くと、秋に歌うことの多い『たきび』の作詞者である異聖歌が本園の地域に住んでいたことが記されている。また地域の祭りとして「たきび祭」が親しまれている。しかし、異聖歌や祭りの由来については知らない幼児や保護者も多い。そこで、異聖歌を題材とし、自分たちの住んでいる地域に興味をもつとともに、異聖歌という名前を知り、家庭でも共通の話題で地域について話す機会を生むような経験としたいと考えた。

2 指導計画

(1) 幼稚園教育要領との関連 今回の活動では特に以下の領域に重点を置いて指導を行った。

人間関係 ねらい (2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ

内 容 (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ

環境 ねらい (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする

内 容 (6) 日常生活の中で、我が国や地域に社会における様々な文化や伝統に親しむ
(11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ

(2) 活動のねらい

ねらい：○子供たちも耳にすることのある歌の中に日野市に住んでいた人が作ったものがあることを知り、いろいろな詩に興味をもつ（知識・思考力・表現力）

○異聖歌という名前とともに、身近な公園に記念碑があることや聖歌の詩にちなんだ祭りが有ることを知り、関心をもつ（思考力・、学びに向かう力）

○家庭で異聖歌や『たきび』の歌についての話をする機会をもつことで、家族で地域についての話を共有する（知識・表現力・人間性）

評 価：○「たきび」の曲を歌うことを楽しみ、詩の作者について興味を抱いていたか

○異聖歌に関心をもって記念碑を見たり、話を聞いたりしていたか

○異聖歌にちなんだ話などを聞いて、自分たちの住んでいる地域に関心をもてたか

○家庭で異聖歌や『たきび』の歌について話す機会がもてたか

(3) 活動の内容

過程	具体的な活動内容	教師の援助・指導上の留意点
導入	・たきびの詩の意味を伝えながら歌を覚えていけるようにする。 ・豊田駅の発着メロディーを聴く。 ・たきびの詩の作者が地域に住んでいたことを知らせる。	○視覚教材（たきび、さざんかななどの写真）を活用し、詩をイメージながら唄が覚えられるようにする。 ○豊田駅の発着メロディーを録音したものを幼児に聞かせ、聞き覚えがあるか、なぜたきびの曲を使っていると思うか等投げかけてみる。 ○異聖歌の名前を知らせ、地域に住んでいたことや、旭が丘中央公園に記念碑があることを伝え興味をもてるようにする。

展開	・園外保育で巽聖歌の碑を見に行く。 ・巽聖歌が住んでいた家があった場を見に行く。	○旭が丘中央公園に行き、記念碑を見る。 碑に刻まれた文字に興味をもてるようにし、そこに『たきび』の詩が刻まれていることを知らせる。 ○みんなで『たきび』を歌う。 ○「たきび祭」について触れる。 巽聖歌と「たきび祭」についての関係に触れ、「たきび祭」にも興味をもてるようにする。 ○地域の動物病院のところで、以前園医としてもお世話になっていた動物病院の場が巽聖歌の家があった場所であることを話す。 ○園から近いことやその場を知っていること等子供たちの思いの発言を受けとめ、巽聖歌が子供たちにとって身近に感じられるようにする。
事後指導	・『たつみせいかのどうようし百選』（編：畠山貞子 録番堂出版）を活用し、他にもいろいろな詩が有ることを知らせる。 ・保護者にも巽聖歌について話をし、興味をもってもらう。 	○『たつみせいか』の詩集から毎日一編ずつ紹介していく、詩をたくさん書いていた人であることを伝えていく。 ○保護者にも巽聖歌についての子供たちの活動を伝え、家庭で話題に上げてもらうことで、地域について家族で関心を向ける機会となるようにする。

(4) その後の様子

園外保育で巽聖歌の碑や家の場所などを見に行った数日後の子供と保護者からのコメント

子供：「たつみせいかさんの石の前でたきびをうたってきたよ。」「いつも帰りに見てるよ。」

「お母さんにおうちの場所を教えてあげたよ。」

保護者：「休日に公園に行くと、碑の前で必ず立ち止まるようになりました。」「『巽聖歌さんが作った歌だよ』と、家族に話してくれました。」「小学生の兄と巽聖歌の共通の話題でつながりました。」などの声が聞かれた。

家庭でも話題に出ることで、保護者もこの地域に関心を向けるきっかけになったのではないかと思います。



旭が丘中央公園 巽聖歌の碑



巽聖歌の住居跡 現在の「たてる動物病院」付近

第6学年社会科学習指導案

日時 令和元年11月12日(火) 第5校時
 学級 日野市立日野第三学校 6年1組 児童数30名
 授業者 石井 浩由

研究主題 「郷土への愛着をもち、地域と共に生きる児童の育成」
 ～『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用を通して～

1 単元名 「戦争と人々の暮らし」

2 単元の目標

○日本の戦争がアジア・太平洋に広がっていった経緯や、国内の様子について調べ、人々の暮らしや他国との関係がどのように変化していったかをつかみ、国内外の被害について理解することができるようにする。

3 単元の指導計画

(1) 評価規準

	ア 社会的事象への 関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・ 判断・表現	ウ 観察・資料活用の 技能	エ 社会的事象につ いての知識・理解
単 元 の 評 価 規 準	- 空襲による被害の様子と現在の様子から、戦争とその時代を生きた人々の暮らしに関心をもち、進んで調べようとしている。 - 戦争の経緯や当時の国民生活に関心をもち、資料を調べて積極的に考えようとしている。	- 日本が戦った戦争やそのころの人々の暮らしについて学習問題を考え、表現している。 - 戦争の状況と人々の暮らしの変化と関連付けて考えている。	日本が国際社会の中で孤立していったことや、戦争がアジア・太平洋に広がっていったことについて、写真や地図、年表などから読み取り、まとめている。	- 戦争がどのようにして始まったかということや、それが拡大していった経緯を理解している。 - 戦争で、日本の国民が大きな被害を受けたことや、他国にも大きな被害を与えたことを理解している。

(2) 単元指導計画 全7時間扱い

時間	ねらい	○学習活動	評価規準／評価方法
第1時	空襲の被害を受けた東京の町と現在の様子とを比べながら、戦時中の日本の様子について興味・関心をもち、学習問題を設定することができる。	○東京大空襲での被害の様子を調べ、戦争とその時代の人々の暮らしに関心をもち、学習問題をつくる。	ア(行動観察と発言・発表) イ(発言・発表とノート記述)

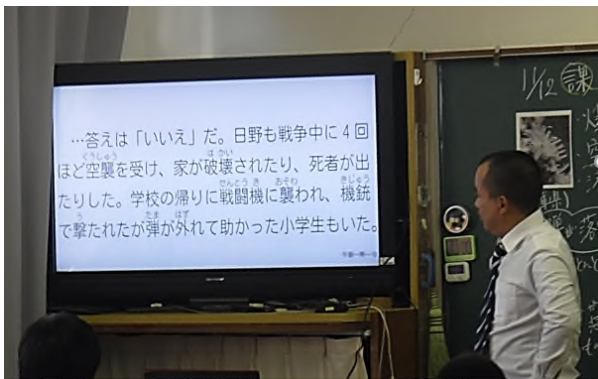
第2時	日本と中国との戦争がどのように始まり、展開していったのかを調べ、中国大陆で戦線が拡大していった経緯を理解することができるようにする。	○日本が中国大陆に進出し、中国との間で戦争が起こった経緯について調べる。	エ（発言・発表とノート記述）
第3時	戦争が、アジア・太平洋の広い範囲に拡大していった経緯や背景を調べ、その影響について理解できるようにする。	○戦争がアジア・太平洋地域へと広がっていく経緯とその背景を調べ、日本の状況や他の地域に与えた影響について考える。	ウ（発言・発表とノート記述） エ（ノート記述）
第4時	戦時中の暮らしの様子を調べ、戦争が人々の暮らしに与えた影響について理解できるようにする。	○戦争が人々の暮らしにどのような影響を与えたのかを調べ、当時の人々はどのような思いだったのかを考える。	ウ（発言・発表とノート記述） エ（発言・発表とノート記述）
第5時	戦争中の子供たちの暮らしの様子を調べ、戦争が子供に与えた影響について考えることができるようにする。	○戦時中の子供の暮らしの様子を調べ、当時の子供たちの思いや願いを考える。	イ（発言・発表とノート記述）
第6時 （本時）	空襲による被害や日本各地に残る戦争遺跡について調べ、戦争によって国民が受けた被害の大きさを理解することができるようにする。	○空襲の様子と被害の大きさについて調べ、戦争が国民生活に及ぼした影響について考える。	エ（発言・発表とノート記述）
第7時	沖縄戦や広島・長崎への原爆投下について調べ、大きな犠牲の上に戦争が終結したことを理解し、この戦争に対する自分の考えを深めることができるようにする。	○沖縄戦や広島・長崎の原爆の被害について調べ、この戦争が大きな犠牲をはらって終わったことを理解し、戦争の学習から学んだことを表現する。	エ（発言・発表とノート記述） イ（ノート記述とテスト）

4 本時の指導（7時間扱いの6時間目）

（1）ねらい

空襲による被害や日本各地に残る戦争遺跡について調べ、戦争によって国民が受けた被害の大きさを理解することができるようにする。

(2) 本時の展開

	学習活動 主な発問 (○) 予想される児童の反応 (・)	◎使う資料 ◇指導上の留意点・配慮事項 ◆学習活動に即した具体的な評価規準(評価方法)
導入 1 0 分	○この写真が何の写真か分かりますか。 ・空襲を受けている写真。 ○どの位の数の爆弾が見えますか。 ・小さいものも数えるともものすごい数の爆弾がある。 ○爆弾が落とされているのはどこだと思いますか。 ・アメリカかな。 ○正解は、日本の兵庫県、神戸市です。 アメリカ軍が日本のそばまで攻めてきて空爆を行っている写真です。爆弾が落とされた下はどうなったと思いますか。 ・家などが焼けて何も残っていない。 ・たくさんの人が亡くなった。	◎空襲を受けて燃え上がる町の様子を捉えた画像(兵庫県神戸市) ◇資料から空襲の激しさが読み取れるようにする。
	空襲は日本にどのような被害を与えたのだろうか。	
展開 3 0 分	○空襲の被害は、他の地域でもありました。資料からどんなことが分かりますか。 ・北海道から沖縄まで空襲の被害を受けている。 ・太平洋側に被害が集中している。日本海側は少ない。 ・人口が多い地域に被害が集中している。 ○東京は大きな被害がありましたが、日野のあたりはどうだったと思いますか。 ・被害は少なかった。 ・同じ東京だから被害は大きかった。 ○日本全国で、20万人の人々が亡くなりました。これだけ、明らかに人口が多い都市に被害が集中しているけれど、何も対策は取らなかったのかな。 ・被害が少ない場所へ逃げた。 ・頑丈な建物を建てた。 ○この資料は何の資料だと思いますか。 ・学校の資料。	◎空襲を受けた主な都市の被害分布図 ◇資料から、空襲が全国に広がっていること、県庁所在地などの人口の多い都市に集中していることを読み取らせるようにする。 ◎爆撃で壊れた鳥居の写真 (歩こう調べようふるさと七生) ◇自分たちの住む地域にも戦争の傷跡が残っていることを知り、戦争をより身近な出来事として捉えることができるようにする。
		 ◎学童疎開の写真

	・被害にあった子供たちの写真。 ○これは、学童疎開といって、空襲の被害の多かった都市の子供達が親元を離れて、田舎に避難したときの写真です。 ○子供たちはどんな思いだったのだろう。 ・空襲から逃れられてよかった。 ・お父さんやお母さんと離れるのは嫌だ。 ・どこにいても安全とは限らないから、恐い。 ○みんなが同じ立場だったらどう考えますか。 ・離れ離れになったら家族のことが心配になる。 ・家族と離れるのは嫌だ。	(歩こう調べようふるさと七生) ◇資料から当時の子供たちの気持ちも考えさせる。 
終 末 5 分	○空襲の被害について分かったことをまとめよう。	◇まとめとして、「空襲によって～」に続く文章を書かせるようにする。 ◆空襲によって国民が受けた被害の大きさについて理解している。(発言・発表とノート記述)

(3) 評価

空襲による被害や日本各地に残る戦争遺跡について調べ、戦争によって国民が受けた被害の大きさを理解することができたか。

5 成果と課題

【成果】

自分たちの住む地域を資料として活用することで、より身近に「戦争」を感じることができ、具体的に空襲の被害や、学童疎開についてイメージしやすかった。本校は冊子に掲載されている地域と少し距離が離れた地域であり、空襲の傷跡など児童にとって身近に感じる事が難しいかもしれないと考えていたが、同じ日野市内であることから児童にとっては身近に捉えることができていた。

【課題】

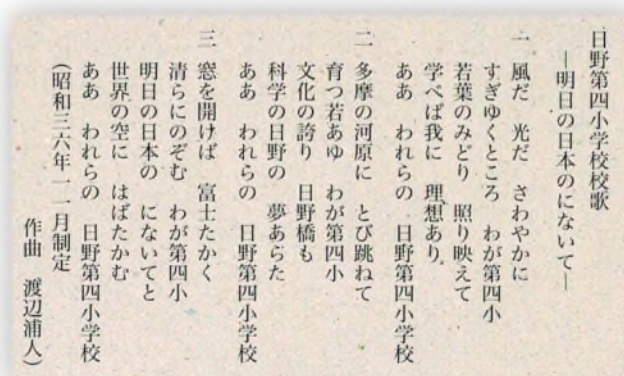
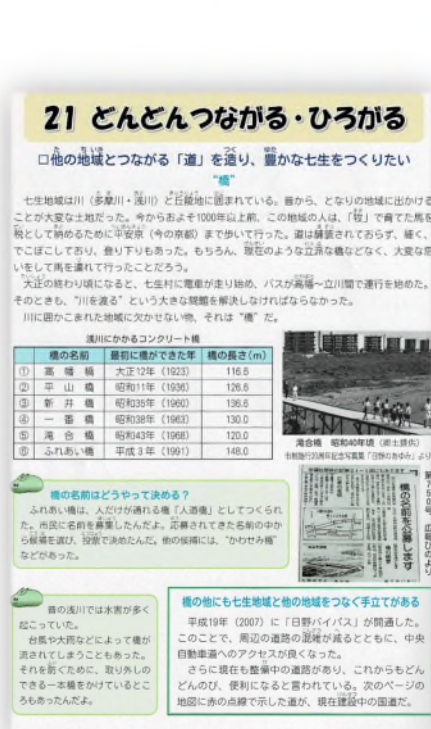
教師が資料を提示するという形で授業を展開していったが、児童自らが冊子を手に取り調べる授業展開にしようとした方が、児童の考えがより深まるきっかけとなったのではないかと考える。また、資料から児童が予想したことや、考えたことを発表した、その予想や考えが正しいのかどうか、資料等で確認する時間を十分にとるようにしたい。

『ねがいをつみ上げた石橋』（道徳）

指導時期	随時 ※	対象	4 年	授業者	日野第四小学校 教諭 町田 禎
単元の目標	郷土の文化財について理解し、郷土の文化財を大切にし、引き継いでいこうとする。				
指 導 観	教科書教材によって郷土を誇りに思う心に共感させるだけでなく、身近にある日野橋から自分たち自身の日野への思いに気付かせる。				
評 価 観	A 理解、判断力；郷土の文化財が現在でも残され、大切にされている理由が分かるようにする。 B 心情；郷土の文化財に込められた願いや、大切に守っていかうとする人々の心に共感させる。 C 実践意欲と態度；郷土の文化を大切にし、それを引き継ぎ、伝えていこうとする態度を育む。				
学習の実際 1 時間扱い	教材・資料 『ねがいをつみ上げた石橋』（光文書院『小学 どうとく ゆたかな心 4 年生』 p. 38～p. 41） 『日野市立日野第四小学校 校歌』（渡辺 浦人 作曲・巽 聖歌 作詞） 『橋』（大日本図書『新版 せみを鳴かせて』 巽 聖歌 著 p. 95～p. 97） 『17 旭が丘に巽聖歌が暮らしていた頃』（日野市教育委員会『歩こう 調べよう ふるさと七生』 p. 38～p. 39） 『21 どんどんつながる・ひろがる』（日野市教育委員会『歩こう 調べよう ふるさと七生』 p. 46～p. 47） 本時の流れ 1. 『ねがいをつみ上げた石橋』を読み、郷土の文化財を守っていくことの大切さを考える。 ① T あつしさんは、なぜ石橋を誇りに思うようになったのでしょうか。 2. 郷土をほこりに思う心に関して、自分たちの住む日野市に対して振り返る。 ② 身近な橋である「日野橋」について考える。 T 皆さんの身近にある橋は何でしょうか。どんなときに使いますか。 C 日野橋。 C 立川に買い物に行くときに日野橋を通るとすぐ行けて便利。 ③ 日野第四小学校の校歌にある、「文化の誇り 日野橋」とはどういうことかを考える。 C 橋を作る職人さんたちが技術と思いをこめて日野橋を作り上げた。 C 立川や都心から新しいものを取り入れる通り道になった。 ④ 校歌の作詞者である巽聖歌の書いた詩『橋』を聞き、文明の発達に思いを寄せる。 ⑤ 『歩こう 調べよう ふるさと七生』 p. 46 『21 どんどんつながる・ひろがる』を見ながら、日野市民の橋や町への思いを感じる。				

	T 日野には他にもたくさんの橋が作られています。『21 どんどんつながる・ひろがる』の中から、日野市民の「誇り」を感じられるところはどこですか。 C 川に囲まれた地域の中で「川を渡る」という問題を解決し、町がより便利になった。 C 橋づくりの技術が上がり、どんどん橋の長さが長くなっていった。 C 橋の名前を市民から公募して、市民にとって親しみのやすいものだった。 ⑥台風 19 号で折れた日野橋の動画を見て、思いを述べる。 C 今までの日野市民が作り上げてきた橋が折れたことは悲しい。 C あんなに大きな台風なのに、落ちずに日野橋は頑張った。 C これからも私たちが橋を守っていこう。 ⑦『歩こう 調べよう ふるさと七生』p.39『ぼくらの団地』を読んで、感想を交わす。 C 今まで育ってきた街並みが無くなっていくことは寂しい。 C でも、そうやって町は発展してきた。
成果と課題	身近にある日野橋や、冊子を活用して日野市の昔の逸話を交えながら考えることで、より身近な話題として題材をとらえ、自分たち自身の郷土を思う気持ちを実感させることができた。一方で、教科書教材と併用することの難しさ、特に時間的制約が大きく、タイミングよく効果的に冊子を活用していくことが、今後の課題である。

※ 指導時期は年間指導計画に基づくと 6 月であるが、本授業で扱う 異 聖歌 を、国語『ごんぎつね』(10 月)の作者である 新見 南吉 と関連付けて紹介する方法も考えられる。



日野市郷土資料館ブックレット2 『たきびの詩人 異 聖歌』



歩こう 調べよう ふるさと七生』p.46

「工場で働く人と仕事」(社会科)

指導時期	10月～12月	対象	3年	授業者	潤徳小・中島 康治
単元の目標	・工場を見学する計画を立て、見学を通して工場の仕事の様子を捉える。 ・生産の工夫や努力、地域とのつながりなどについて捉え、工場と自分たちの生活とのつながりについて考える。				
指導観	『ふるさと七生』の冊子を利用して、旭が丘地区の現在の様子と昔の様子を比較する。事前に当時の旭が丘の様子を学習することで、単なる工場見学だけでなく、バスの車窓や歩行中も旭が丘という土地の今と昔を比較し、俯瞰していけるような実りある社会科見学にする。				
評価観	【A知識及び技能】 ・工場で働く人の努力や工夫、原料や流通を通じた他地域とのつながりや、地域とのつながりを大切にする工場の人々の思いを理解している。 ・工場見学において、調べる観点にもとづいた適切な方法で調べ、分かったことを見学メモやノートなどにまとめている。 【B思考力、判断力、表現力等】 ・工場の仕事の様子について、学習問題や学習計画を考え、表現している。 ・工場では様々な工夫や努力により、衛生的で安全な製品を効率良く生産していることについて考え、適切に表現している。 【C学びに向かう力・人間性】 ・工場について意欲的に調べ、工場の仕事と自分たちの生活とのつながりを考えようとしている。				
学習の実際 3時間扱い	1 学習問題を作る 日野市には台地、低地、そして丘陵地の3種類の地形があることを地図で確認しつつ、旭が丘の場所を子供たちと一緒に確認をした。旭が丘にはコニカミノルタ、日野自動車、帝人、そして凸版印刷メディアプリンテック東京はじめその他多くの工場があることが分かり、子供たちから『なぜ日野台地（旭が丘）には多くの工場が建っているのだろう』という疑問が出て、これを学習問題とした。  トッパンフォームズ（株）日野センター  日野台地（平山工業団地）				

	2 自分の考えを書く 子供たちがこの問題に対する自分たちの考えをノートに書いた。その中には、「昔、台地には家が少なかったのでは」「豊田の近くがずっと昔から発展していたからではないか」「川が流れる低地に工場を作ると川が汚れるから」「中央自動車道やバイパスが通っているから都合が良かったのではないか」など、多様な考えが見られた。 3 『ふるさと七生』を使って学習問題に対する答えを探る 子供たちと一緒に『ふるさと七生』39ページの旭が丘付近の地図（昭和26年）を確認した。その結果、当時の旭が丘には今のような工場が全く見当たらず、辺り一面、桑畑だらけであることが分かり、子供たちはとても驚いた様子であった。子供たちは、「このような桑畑だらけの状態からなぜ現代のような工場群へと発展したのか」と、新たな疑問を調べる意欲を高めていた。  旭が丘付近の地図昭和26年（1951） 『七生の冊子』の39ページの「昭和40年代の終わり（1975）にかけて、日本の経済は目覚ましく発展した。輸出が増大し、国民の所得も増えていった。「高度経済成長」の時代だ。東京で働く人が増加し、住宅が不足した。日野町でも人口が増えていった。そこで、昭和34年（1959）日野町は、『市街地開発地域』の指定を受けて国や都からの財政援助をもらい、道路、上下水道、学校、公園などの整備に着手した。また、平山台への工場建設を誘い（工場誘致）、帝人東京研究センターや東芝タイプライターなどの会社が次々と出来た。平山台工業団地の誕生だ。」の文章を子供たちと一緒に読み合わせをし、輸出が増大し、国民の所得増加から日野町でも土地を求める人が増え、国や都からの財政援助を受けていく中で町ができ、また、積極的に工場を誘致したことで今のような工場群が出来たことが分かった。
指導の感想	子供たちの学習感想からは、「昔の旭が丘は自然が多いことが分かった」「経済発展によって、製品を沢山作ったり研究開発したりする必要性がきっかけとなり、今の工業団地があるなんて知らなかった」「昔は畑や桑畑ばかりでびっくりした」「今度の社会科見学で自然の名残があったら、確認してみたい」「もっと日野の歴史について知りたくなった」など多様な内容がみられ、担任としては、社会科見学の前に子供たちと実りある学習ができたこと、手応えを感じた。

「単元名：用水について調べよう」（総合的な活動の時間）

指導時期	6月～11月	対象	4年	授業者	日野第八小学校 洞口 早希
単元の目標	○自分たちの身近に流れる用水について関心をもち、実際に見たり、用水の管理に関わっている人の話を聞いたり、資料で調べたりする活動を通して、特徴やよさについて考えることができる。 ○用水について調べ、考えたことを地域に紹介することができる。				
指導観	日野用水は、450年の歴史をもち、古くから日野の土地を潤してきた。八小の学区内にも新井地区、落川地区に浅川や程久保川から引いてきた用水があり、身近な場所に多数残っている。児童にとっては身近な遊び場となっているところもあれば、入ってはいけない場所となっているところもあり、身近ではあるが、用水の本来の存在価値を知らずにいる児童が多い。そこで、用水のよさと今でも用水を守り、生活の中に用水がある地域のよさを感じることができるよう本単元を設定した。				
評価観	A課題解決の資質・能力 ○用水について関心をもち、進んで調べることができる。 ○自分の課題について自ら調べ、主体的に解決することができる。 B学び方・考え方 ○資料を調べたり地域の方の話を聞いたりすることを通して、用水について深く考えることができる。 C主体的・創造的に取り組む姿勢 ○問題解決的な学習活動において、自ら考え、友達と協力して取り組むことができる。 ○用水の必要性や管理などについて考えたことをみんなで話し合うことができる。 D自己の生き方 ○用水の在り方について自分なりの考えをもち、自分にできることを発信することができる。				
学習の実際 (20時間 扱い)	※活動内容、冊子の活用、学習方法、学習形態、ゲストティーチャー、フィールドワーク等 1～5 課題を見つけよう ・用水についての課題をもつ。 ・地域にある用水を思い浮かべる。 ・過去に用水に関わった経験を思い起こし、クラスで共有する。 ・用水を見学する。 ・自分の課題（知りたいこと・調べたいこと）をもつ。 6～15 調べよう 自分の課題について調べる。 ・資料を収集する。（『ふるさと七生』の活用） ・緑と清流課（森田さん）の話を聞く。 ・水と暮らす日野（井上さん）の話を聞く。 ・調査する。（用水探検） ○向島用水 ○落川用水…取水口や川と合流するまでの様子を探る。 ・調べたり、見たり聞いたりしてきたことを振り返る。 16～20 深めよう…行動（発信）しよう【用水サミットを開こう】 ・用水の大切さや必要性について考え、話し合う。 ・今、地域に現存する用水を守るために、今の自分たちにできることは何かを考え実行する。				
指導の成果	○用水について、歩いて観察したり、資料で調べたり、地域の方々の話を聞いたりすることを通して、用水の良さを見つけることができ、用水を身近に感じる事ができた。 ○市の「緑と清流課」や「水と暮らす日野」の方々のような、用水を守り、伝えていこうとする人たちの存在を知り、つながりをもつことができた。 ○用水が取り巻く地域になった経緯を知ることにより、用水に囲まれた自分たちの地域の環境について考え、用水を守ろうと思う気持ちをもち、地域への愛着を高めることにつながった。 ○自分たちの身近なところから水資源を守ることができることが実感できた。 ○用水をより身近に感じる上で『ふるさと七生』の冊子の活用が役に立った。				

「お米について調べよう」（社会科）

指導時期	5月～11月	対象	5年	授業者	日野第七小学校・中野健
単元の目標	米づくり及び米に関する調べ学習を通して、米の価値や米作りに携わる人々の工夫や努力に気づき、農業や自然環境を守ろうとする気持ちを育む。				
指導観	米づくり体験や社会科の農業に関する学習を通して学んできたことと、自分の実生活を関連付けて考えさせることで、自分の住む町でも地域の自然や伝統を守りながら農業に励む人々がいることを理解し、地域の自然や農業を大切にしていこうとする気持ちや地域への愛着をさらに深めようとする。				
評価観	A 日野市の農業に携わる人々の努力や工夫、耕地整理、品種改良などについて、理解することができる。 B 日野市の農業について、資料を根拠に自分の考えを発表することができる。 C 日野市の農業に関心を持ち、資料から農業に携わる人々の工夫や努力について意欲的に調べようとする。				
学習の実際	本時までの学習 ・社会科「食料生産を支える人々」 ・米づくり体験「お米の出前授業：パルシステム東京」 ・調べ学習・発表会「お米について調べよう」（本時） - 給食の献立表や食材が入っていた箱や袋などを基に、給食の食材がどこから来ているかを調べる。 ・栄養士さんが「今日の野菜は、日野市の物を使っています」と言っていたよ。 - 日野市の農業について、知っていることや疑問を出し合う。 ・日野市のどこで作っているのだろう。 ・市内を車で走っているときに、畑を見たことがあるよ。 - 資料（『わたしたちの日野』から抜粋）を基に、日野市の農業について調べる。 ・市内では、キャベツ・玉ねぎ・大根・人参・長ねぎ・りんご・梨などが作られているんだね。 ・多摩川近くの地域や、浅川より南側の地域で主に作られているね。 ・昔は、日野駅近くでも米づくりが盛んにおこなわれていたようだ。 - 資料（『歩こう調べようふるさと七生』14 平山おかぼ、豊田地域の航空写真と豊田の耕地整理）を基に、日野市で農業に携わってきた人々の工夫や努力について調べる。 ・日野市は水には恵まれているけれど、地形的には米を作るのは難しいんだね。 ・用水で米づくりを行うことは大変なんだね。 ・用水をつくったり、品種改良をしたりして、いろいろな工夫や努力をして今につながっているんだね。 - 学習を振り返り、日野市の農業について自分の考えをノートにまとめる。 ・昔から様々な人々の努力と工夫で続いてきた自分の町の農業を、これからも大切にしていきたい。				
成果と課題	成果：社会科の農業単元の最後に位置付けることで、これまで学習してきたことを自分の生活と関連付けて振り返ることができ、農業をより理解し、大切にしていこうとする気持ちと地域への愛着を育むことができた。 課題：前半は、第3学年の学習内容に関連するところでもあるので、第5学年として何を学ばせるかをはっきりさせておく必要があると感じた。「平山おかぼ」については、実物を見せるなど、生活とのつながりをもっと実感できるような指導内容・展開にできるとよかった。				

第4学年 特別の教科道徳 学習指導案

日時 令和元年10月8日(火) 第5校時
学級 日野市立旭が丘学校 4年1組 児童数29名
指導者 尾崎 恒平

1 教材化の意図

『歩こう 調べよう ふるさと七生』から巽聖歌のページを開くと、本校の学区域である旭が丘に住んでいたことを知ることができる。記念碑がある旭が丘中央公園は、本校児童の絶好の遊び場である。数々の名作を生みだしてきた巽聖歌を知り、身近に感じられるように教材化することにした。

歴史上の人物をよく知る方法として、伝記を読むことが挙げられる。伝記はその人物が主人公として書かれているため感情移入をしやすい。そこで、巽聖歌を主人公とした伝記を作ることとはできないかと考えた。巽聖歌の足跡が分かるようにすることを念頭に置きながら、巽聖歌を身近に感じられるようにすることを目指した。

資料として、郷土資料館の展示パネル、郷土資料館が発行している資料、巽聖歌の作品の載った書籍、平成29年の郷土教育推進研究報告書を調べた。巽聖歌が日野について言及した詩なり文章なりを探したが、日野に住んでの活動は、児童詩の作者としての確固たる地位を築き各地に出張していたようで、その各地で見たものを詩にしていることが多いようであった。平成29年度の郷土教育推進研究でも取り扱っていた詩、『雲雀の声は』で日野の情景が出ていて、春の畑や競馬場の様子を歌っている。『歩こう 調べよう ふるさと七生』にも載っている『ぼくらの団地』では、その日野の様子が変わっていくことを歌っている。この辺りの時期を伝記にすることも考えたが、手元の資料だけでは日野での生活を描くことが難しかった。

巽聖歌の詩を読むと、故郷日詰町への愛がとても強い。このことは、故郷への思いを学ぶことにつながるのではないかと考えた。特に若いころの詩は、その思いがまっすぐに読者に伝わるものが多い。そこで、聖歌が生まれてから東京に出るまでの伝記を作り、故郷への思いを考えするという教材を作ることにした。

2 主題名 「故郷への思い」 (内容項目 C 郷土を愛する態度)

3 教材名 『故郷の詩 ～巽聖歌～』

4 主題設定の理由

自分が生まれ育った土地には、ずっと忘れない思い出が残るものである。山や川や海などの自然、周りにある建物、歩いた道、遊んだ公園、出会った人々などが記憶に残り、それが郷土を愛すると心となっていく。

日野市にゆかりのある詩人巽聖歌は、明治38年に岩手県紫波郡日詰町に生まれた。東京の時事新報社で働くことになり上京する。その後も仕事の関係であったり世の中の情勢であったりで、岩手に戻ったり、東京に出てきたり、福岡で働くことになったりと住まいを変えた。昭和23年には日野に住まいを作った。

聖歌の作る詩には、故郷岩手県の自然を歌ったものが多い。幼少時代から自然豊かな日詰で、自然を愛して育った事が詩から伝わってくる。特に初期の作品には、東京で働きながら、故郷のことを考える聖歌の思いがひしひしと感じられる。その聖歌の故郷への愛を想像し、故郷を愛するという事について考える。

5 指導の工夫

(1) 巽聖歌が主人公の物語を資料にする。

- ・巽聖歌が主人公の三人称物語を資料にする。史実に基づきながら、当時聖歌が考えたと思われるところを、巽聖歌の言葉として表現した。

(2) 巽聖歌の詩を扱う。

- ・故郷を愛する心が伝わってくる詩をいくつか取り上げ、そこから巽聖歌の思いを想像する。

(3)『歩こう 調べよう ふるさと七生』の利用。

- ・導入と展開の後半に『歩こう 調べよう ふるさと七生』を利用し、日野市や異聖歌の事を調べる。

6 児童の実態

異聖歌については、3年生の時に中央公園で「たきび祭」が行われていることを調べている。異聖歌が日野市に住んでいた詩人であること、童謡『たきび』の作者であることはすでに既習事項である。

授業の中で『ふるさと七生』の冊子を利用し、『七生の豊かな自然を訪ねて』を読んだ。日野に自然がたくさんあることが写真や文章からとらえることができた。この資料の異聖歌の章は読んでいないので、道徳の授業以降に異聖歌について調べるときに使うことができると考えている。終末の自分について考える場面で、「日野市の良さはどんなところにありますか。」の発問に対しこの資料を使う。

7 本時の学習

(1) 本時のねらい

- ・異聖歌の故郷への愛を想像し、故郷を愛する気持ちを考える。

(2) 本時の展開

	学習活動（○主な発問 ・ 予想される児童の反応）	○指導上の留意点 ☆評価
導入	1 異聖歌について知っていることを発表する。 ○異聖歌という人を知っていますか。 ・『たきび』の詩を作った人 ・日野市に住んでいた。 ・中央公園のたきび祭に関係がある人。	○異聖歌の写真を掲示する。 ○『歩こう 調べよう ふるさと七生』の異聖歌のページを開ける。
展開	2 資料『故郷の詩 ～異聖歌～』を読んで考える。 ○故郷を離れ横須賀に行くことに決めたとき、七蔵はどんなことを思っていたのでしょうか。 ・東京でがんばるぞ。 ・出版社で働けるかな。 ・家族と別れるのはさみしいけどがんばるぞ。 ○『赤い鳥』に詩が採用されたとき、七蔵はどんなことを思ったのでしょうか。 ・あこがれの本に載った。嬉しい。 ・これで、詩を作る仕事につけるぞ。 ・故郷のよさが、読む人に伝わるかな。 3 故郷を思う七蔵の気持ちを考える。 ○七蔵にとって、故郷とはどんなところでしょうか。詩を読んで考えましょう。 ・母やきょうだいに住んでいるところ。 ・原っぱがあり、そこで遊ぶのが楽しい。 ・秋の景色が美しい。 ・田んぼに生き物がたくさんいる。 ・自然がたくさんあるところ。	○異聖歌がまだそのペンネームを使う前の時代である。資料では本名の七蔵を使っている。異聖歌の本名について説明する。 ○「故郷」という言葉について説明する。  『故郷の詩 ～異聖歌～』の範読を聞く ○別紙資料の詩を読む。詩の書かれた背景も説明する。 ○一つの詩を選ぶ。その詩から七蔵にとっての故郷はどんなところか考えさせる。

	4 日野市の良さについて考える。 ○他の市に住む人に、「日野市の良さはどんなところですか。」と聞かれたら、何と答えますか。 ・公園がたくさんあり、緑が豊か。 ・川が近くにある。 ・自然が豊かだけれど、都心にも行きやすい。 ・大きいスーパーがあって便利。	○『ふるさと七生』の資料を使って、日野市の良いところを探してもよいとする。 ☆故郷を愛する気持ちをもてたか。
終末	5 教師の説話を聞く。	○担任の郷土についての話をする。

(3) 評価の観点

- ・故郷を愛する気持ちをもてたか。



友達と一緒に異聖歌のページを調べる

8 本時の授業から考えられる今後の発展

(1) 異聖歌と日野とのつながりについて考える

- ・聖歌が日野に住まいをもったのは、上京して住むところを探していた時に、短歌の弟子が日野に持っていた家を世話してくれたということである。当時の日野は桑畑の広がる、自然の多い所であった。資料ではその当時の理由を詳しく知ることができなかったが、世話をしてもらったということだけではなく、岩手の自然が重なるような、そんな気持ちを抱いたのではないかと想像する。

児童にとっては日野の良さを考えることが終末の振り返りとなるが、聖歌が日野を選んだ理由を考えることが、日野の良さ、自然がたくさんあるという良さを考える上で役に立つと思われる。

(2) 異聖歌の詩の学習

- ・異聖歌が作った詩は、『赤い鳥』に掲載されていることから、子供に向けての詩が多い。言葉の調子や、リズムがよく考えられている。詩を取り上げて読んで覚えることもよい学習となりうる。暗唱すると、美しい言葉を学ぶことができるであろう。日野市出身の作家の詩を覚えることは、郷土教育につながると思われる。

9 参考文献

- ・『平成29年度 郷土教育研究報告書(6) 地域に生きる「異聖歌の心」』
- ・『ふるさとと子供の心 異聖歌の詩と生涯』内城 弘隆 編著 ツーワンライフ出版
- ・『たきびの詩人 異聖歌』日野市郷土資料館
- ・『異聖歌作品集(上)(下)』異聖歌作品集発行委員会



日野市の良さについて
考えを発表する

ふるさと うた たづめいか
故郷の詩 ～ 異聖歌 ～

日野市に住んでいた詩人で童よう作家の異聖歌 本名 野村七蔵（のむらしちぞう）は、自然ゆたかな村、岩手県紫波郡日詰町に生まれました。七人兄弟の末子で、家族とくらししていました。

七蔵は小学校のころ、暗算坊ぼうぼうと呼ばれるほど計算が速く、成せきゆうしゆうでした。小学校卒業後には、さらに上の学校に行き勉強をしたかたのですが、早くに父をなくし、母一人で多くの兄弟を育てている中、わがままを言うわけにはいかず、兄のかじ屋を手伝いすごしました。

七蔵が十四歳の時です。友達の家に遊びに行つた七蔵は、当時大流行していたざしざし 赤い鳥あかいとりを見せてもらいました。赤い鳥はわくわくするような童話や、美しい詩がたくさんのでいました。七蔵はそのざしに心をうばわれ夢中で読みました。そして読んでいるうちに、僕も 赤い鳥にのっているような童話や詩を作つてみたい。」

七蔵はかじ屋で働きながら、詩を作るようになりました。当時は 赤い鳥の様な子供向けのざしがたくさんありました。七蔵は作つた詩をざしに送るようになりました。

ざしを作っている会社は東京にありました。七蔵の作品を読んだ東京の出版ん社の人が、彼には才能がある。ぜひうちで働いてもらいたい。」

と七蔵を東京によぼうとしました。ところが七蔵がまだ十八歳だということを知り、会社の人は、若すぎるとさい用を見送りました。

七蔵はそれでも東京に行く夢をあきらめませんでした。詩を作る友だちをたより、東京に近い神奈川県かながわけんの横須賀よこすかに住むことにしました。

僕は東京の出ばん社に入つて、たくさん詩を読んでもらうんだ。」

横須賀では計算の才のうを生かして会計の仕事をしました。そのかたわら、詩を作ることも続けていました。

横須賀は港町で、外国の文化がまざり合つた町でした。あわただしく行きかう人々と、東京の出ばん社で働けるのかという不安もまざり、七蔵は故郷の事をなつかしく思うようになりました。兄弟は皆元気でやっているだろうか。母は病氣せずに元気にすごしているだろうか。そんな思いで作つたのが、母はとどとという詩でした。小さいころ母の背におぶわれながら、真赤なヒガンバナを見たことが思いかびました。七蔵は故郷からはなれ、こいしい思いの強い今こそ、故郷のことを書いた詩を 赤い鳥に送ろうと思いました。

七蔵の思いは通じました。母はとどとは 赤い鳥で初めてあ入選となりました。七蔵のうれしかつたことといふたありません。詩作りを始めるきっかけになった 赤い鳥に自分の詩がのたのです。

七蔵は詩の才のうをみとめられ、東京の出ばん社で働くことになりました。そして七蔵は、故郷日詰の詩をたくさん作りました。七蔵の故郷を愛する気持ちには、読む人の心をとらえました。

お山の広ばでは、温かい日差しの原ばで、思いぎりかけ回つて遊んだことを詩にしました。

秋では、故郷で聞いた鳥の声、裏の山のことをなつかしく思う気持ちを詩にしました。

そして、田んぼに水を入れる水口のじよう景をリズムよく詩にした 水口は、赤い鳥で最高ひようかをえました。

七蔵は東京で夢を叶え異聖歌として出発しました。心の中には故郷の美しい景色が広がっていました。

（尾崎 恒平 作）

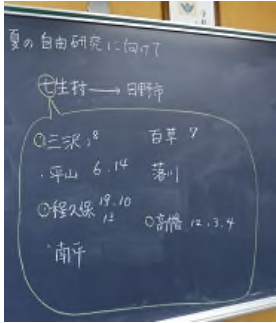
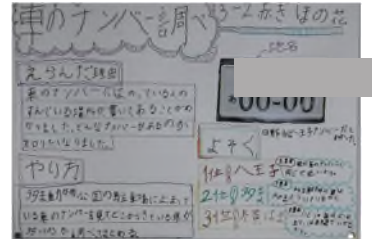
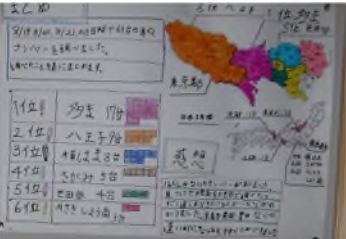
「農家の仕事」(社会科)

指導時期	10月～11月	対象	3年	授業者	東光寺小学校 細島 由美子
単元の目標	生産の工夫や努力、地域とのつながりなどについてとらえ、農家と自分たちの生活とのつながりについて考える。				
指導観	日野産の農作物が多く作られていることを知り、農家の努力や工夫が、「おいしく安全な食材で『地産地消』してほしい」という願いにつながっていることを理解させたい。そのため、調べ学習や見学で、自分たちの生活につながっていることに気付かせる場面を多く設定していく。				
評価観	A 農家の人の努力や工夫、地域とのつながり、地域の農業のあり方についての農家の願いを理解し、分かったことをノートなどにまとめている。 B 農家の仕事の様子から様々な工夫や努力について考え、地域の農家がおいしく安全な農作物を生産していることに気付き、表現している。 C 農家の仕事について意欲的に調べ、自分たちの生活とのつながりを考えようとしている。				
学習の実際 10時間扱い	教科書以外の使用教材 『わたしたちの日野』(P.36～P.43 農家の仕事、P.103～P.107 林丈太郎) 『歩こう 調べよう ふるさと七生』(P.32～P.33 「平山おかぼ 七生村の農業」) 指導計画 1・2時 日野産の農作物などを調べる。 3時 農家の苦労を予想し、どのような努力や工夫があるかや、調べたいことについて学習計画を立てる。 4～6時 近隣の梨園に見学に行き、仕事の様子や工夫について調べる。 7・8時 農家で様々な努力や工夫について、見たことや聞いた話をまとめる。 9・10時 地域のいろいろな作物が、自分たちの生活の中で、食材として使われていることを知り、地域の農家の人々の願いに気付く。 本時(3/10) 1 給食に使われている日野産の食材を確認する。(プリント使用) 2 野菜や果物を育てるにはどのような苦労があるか予想する。 - 虫や病気、台風などの被害がありそうだ。 - 広い畑で仕事をするのが大変そうだ。 3 昔のこの地域の人々は、どのようにして農業をしていたか、『歩こう 調べよう ふるさと七生』の中から見付け、『平山おかぼ』のページで、日野では昔から農業が盛んで、地域で農作物の改良や農家間の協力がされていたことを確認する。 5 地域の農家に梨園があることを知り、どのようなことに興味・関心をもったか、質問や調べたいことを考える。 - 一番大変なことは何ですか。 - 虫や病気、台風から梨をどのようにして守っているのですか。				
成果と課題	成果：昔から日野の地域で農業が続けられていて、努力や工夫がされていたことを知ること、児童は今の地域の農業にも興味をもちやすく、努力や工夫について意欲的に考えることができた。 課題：第3学年には『歩こう 調べよう ふるさと七生』の内容は難しく、教師が補足したり『わたしたちの日野』で再確認したりする必要があった。				

「どんどんつながる・ひろがる」(七生冊子 p 46～47・総合的な学習の時間)

指導時期	11月	対象	4年	授業者	仲田小学校 久保田聡
単元の目標	七生地域と日野地域をつなげる交通網(橋・道路・多摩都市モノレール)の中から、「多摩都市モノレール」(以下「モノレール」と示す)の事例を中心に、七生地域および日野市全体が発展していった様子について理解を深める。				
指導観	普段あまり行くことのない七生地域が、上記の交通網、とりわけモノレールを中心につながっていることを通して、同じ日野市である七生地域への興味・関心を深めさせたい。また、モノレールおよび周辺地域の発展の様子を知ることにより、モノレールの利用が、地域の活性化につながることもつかませたい。				
評価観	A 七生地域と日野地域をつなげる交通網の場所、概要をつかむことができる。 B モノレールおよび周辺地域の発展に携わる人々の工夫や努力、思いや願いを考えることができる。 C モノレールおよび周辺地域の発展の様子について意欲的に調べ、自分もモノレールを利用して地域の活性化に携わりたいという意欲を高める。				
学習の実際 5時間扱い	1時 ①七生地域の場所と各地名について、社会科副読本の日野市地図で確認する。 ②日野市を通る主要な交通網、河川について調べる。 ③浅川に掛かる6つの橋について調べる。(七生冊子 p 46) ④交通網の発展に伴い、日野市の人口が、市政発足以来どれくらい変化したのかを調べる。(七生冊子 p 44) 2時～4時 ①人の移動をより活発化させるため、南北をつなぐ新たな交通手段としての「モノレール」について調べる。(七生冊子 p 47) ＜調べる視点＞・いつできたか? ・どこからどこまで通っているか? ・沿線施設には何があるか? ・駅別利用者数ランキング ・年間利用者数 ・運賃収入 ・沿線施設の利用者数、など。 ※インターネットや本でも情報を集め、児童に資料として提示する。 ②沿線施設に頼らず、モノレールが、利用客をさらに増やすためにどんな工夫や努力をしているのか、ホームページで調べる。 ③モノレールを利用する人が増え、周辺施設も発展すると、そこに住む私たちの生活はどう変化するか、話し合う。 5時 ①多摩都市モノレールの延伸計画について知る。(七生冊子 p 47) ②延伸計画地域の人たちの生活はどうなりそうかを話し合う。 ③延伸計画について、モノレールおよび東京都の担当者の方の考えや、モノレール運営を通じた地域活性化への思い、願いを聞く。 ④一言感想を考え、発表する。 「多摩都市モノレールは、そこに住む人たちにとって〇〇である。」				
成果と課題	成果 モノレールおよび周辺地域への発展の様子を調べることにより、モノレールに乗って七生地域や他地域に行ってみたい、調べてみたいという意欲が高まった。 課題 日野市以外の沿線地域や施設に、興味関心が拡散してしまう傾向がみられた。 七生地域、日野市内に絞った手立てがさらに必要だった。また、総合的な学習の時間として、探究過程のプロセスにかける時間や手立てが不足していた。				

「夏休み自由研究での活用」(国語、社会、理科等)

指導時期	7月	対象	3年	授業者	夢が丘小学校・永吉 智洋
単元の目標	これまでの学習内容等を土台に、図書活動や自由研究等と関連させ、夏休みに取り組む地域を題材とした探究活動や自由研究に関する手掛かりをつかむ活動を通して、郷土や地域に対する愛着や親しみを育む。				
指導観	郷土や地域に対する興味・関心を土台にして、七生冊子を関連させ、「調べ学習を進めたい。」という意識を高めたい。「七生」の由来をみんなで確認するとともに、「七生の地域には何があるのか。」を、ペアやグループなどの協働的な活動の中で相互に読み合い、「知りたい」「行きたい」という気持ちを高める。				
学習の実際	事前の取組・教育活動 ①地域に対する意識を高める学習活動(4～7月) ・社会「わたしたちの住むまちはどんなまち」 ・理科「こん虫を育てよう」 ②他教科等との関連(7月の取組) ・国語「本はともだち(読む)」、理科「じゅうけんきゅう」 ・特活「夏休み作品展(夢小)に向けて」 ・国語、理科の授業を踏まえ、夏休みの課題である自由研究の取組みについて話し合う場面において、七生冊子を開き、これまでの学習に気付かせ、郷土に対する意識を高めた。  特別活動での取組み ①「七生」の由来をみんなで考える。 ②七つの地区には、それぞれどのような施設や見どころがあるのかを調べる。 (ペア・グループ活動を中心) ③見付けたことを、クラスで共有する。  『夏休みの作品展』に出展した児童の作品例   『多摩動物公園』に集まる車のナンバー調べ				
成果と課題	成果 『七生冊子』を、学習活動と関連させて、郷土や地域を知る導入ができた。学習内容と郷土や地域の関係に児童が気付くことができた。 課題 日頃から、学習内容と郷土や地域との関連を意識した授業の展開が必要である。また、保護者の協力や理解を促し、より効果的な活動にしていける必要がある。				

3 各委員へのアンケート【成果と課題】

令和元年度の研究を、(1)「活動の成果」、(2)「今後の課題」、(3)「研究計画、組織他」、(4)「令和2年度の研究活動」の項目を立て、各委員のアンケートから生の声を抽出し、研究の成果と課題とした。

(1) 活動の成果

①『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用

- 各委員が冊子を活用した研究授業ないし実践事例に取り組み、今後活かせる部分や課題について検討することができた。
- 社会科の「わたしたちの東京都」という単元の交通網を学ぶ授業で、P28～29の『はじめはとぎれていた京王線』の資料を活用した。新指導要領で扱われる「市の移り変わり」で50年前の日野の写真を見比べた時と同様に、児童の反応がとても新鮮で興味をもっているようだった。自分たちになじみのある資料を使用することで、児童も学習に意欲をもち、郷土に親しみをさらにもてるのではないかと感じた。
- 様々な実践事例を作ることができた。
- 社会科、道徳、総合と、多くの教科において七生の冊子と関連させ授業することができた。
- 今回、道徳の教材を作成したことで、子供たち自身が、今まで名前を知っているだけ程度の存在であった巽聖歌が身近な存在になったように感じた。ここから調べ学習につなげるなど、導入としても七生の冊子が活用できると分かったことが成果として挙げられる。また、写真やデータを活用して、夏の課題としての活用例が出たことも活用の幅が広がり、より使いやすい資料になったと感じた。
- 授業や自由研究で七生の冊子を教科書の副教材として活用することで、授業内容の理解を深める役割があったと思われます。
- 研究授業を通して、七生の冊子の、具体的な授業への活用の仕方を知ることができた。
- 七生の冊子を効果的に授業の中で活用する実践を参観し、どのように活用すればよいかを理解することができた。
- 七生地区でなくても、七生の冊子の活用が有効だったことが分かった。
- 地域について詳しく書いてある資料が、児童が自分の住む地域を詳しく知ろうとする切っ掛けとして有効的に機能したこと。
- 特に社会科において戦争資料が活用できたこと。
- 巽聖歌の授業をして、巽聖歌の生い立ちや、作品を知ることができた。
- 七生の冊子の活用を考えていく過程で、地域のことが少しずつ分かってきた。
- 自分自身が七生地域に対して興味や関心、知識を深めることができた。

⇒社会科、道徳、総合的な学習の時間など多くの教科において、七生の冊子と関連させた実践事例を蓄積することができた。

⇒七生の冊子を使った授業で、郷土に対する児童の親しみや関心を強めることができた。

②夏季フィールドワーク研修会

- 研修会では平山地域をまわり、歴史の痕跡に触れることで、まずは自分自身が郷土への興味を深めることができた。
 - 研修会は地域のことを学べてとても勉強になった。
 - 研修会では特に遺跡調査が印象に残っている。あのようなことがされているのだと初めて知って、貴重な体験だった。
 - 研修会を通して、市内の認識が深まった。
 - 研修会では七生の冊子をもとに、七生地域を歩いてみることができました。七生の冊子で書かれている内容を歩きながら確認することもでき、実際に歩いたのでイメージがつかみやすく、生徒にも説明しやすくなったのではないかと思います。
 - 平山地域の先史・歴史的な発展の様子を、実体験を通して知ることができてとても有意義であった。自分が該当学年を担当する際には、今回の経験をもとに、児童に話をしたり教材を活用したりしたいと思った。
 - 研修会においては、地域の特色や歴史を学び、授業づくりに生かすことができた。
 - 研修会など、実際に地域に出て見学等ができたことがよかった。実際に教材化していくために、見通しをもつことができた。
- ⇒平山地域を実際に歩いてみることによって、七生の冊子で取り上げている内容について理解を深めるとともに、授業づくりについての見通しをもつことができた。

(2) 今後の課題

①『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用

年間指導計画への位置づけ

- 既存の単元計画に無理やり七生の冊子の内容を組み込むのは教員の方々にとっても負担が大きい。学校全体でカリキュラムに取り入れやすい体制を整えるべきではないか。
 - 七生の冊子を活用した研修会を行う上では、事前学習に加えて活動後の報告・発表の時間も多くとれると良いと思う。
- ⇒年間指導計画に位置付けるようにする。

活用の啓発

- 現場教員レベルでの浸透がまだ弱い。
- 七生の冊子の活用方法をどのように他の先生方に広げていくか。どこまで共有化し、一般化できるかが今後の課題だと思う。
- 七生の冊子を多くの方が利用できるような取り組みがあれば良いと思います。
⇒研究の様子や指導事例を折に触れてC4thなどで発信する。

活用例、活用の手引き

- 内容が盛りだくさんなため、どの部分が何の教科の何の単元に使えるかなど、考えていく必要があると感じた。また、資料集として指導計画に入れ込みながら授業に使えるのは、該当学年が3年生だけになってしまうので、他学年での活用例も考えていかなければならないと感じた。
- 郷土教育も重要だが、郷土教育のために各教科があるわけではなく、各教科の中に郷土教育が取り入れられるべきである。自然な形で、授業の中に活用できるような取り組みを適切に精選して、発信していく必要がある。
- 授業のメイン教材として活用することは難しく、教科書の副教材や参考資料として活用する場面が多くみられた。様々な視点による七生の冊子の活用例を知る必要があると思う。
- どのページがどの教科に使えるかを一覧にできないか。
- 七生の冊子自体が難しいため、児童から進んで冊子を手にする場面をどのように設定するか今後、研究が必要だと思った。
- 七生地区限定の資料ゆえ冊子として児童が自発的に読むにはハードルが高い、やはり全市版として扱えるものであってほしい。
⇒七生の冊子を使った授業事例集など授業づくりの参考になるものを作成して公開する。

②夏季フィールドワーク研修会

- 研修会は令和2年度も続けてほしい。今回体調を崩し参加できなかったが、地域と地縁のない異動したての教員にとっては大変ありがたい。
⇒実施する方向で、今後、内容や開催日時などを固めていく。

(3) 研究計画、組織他

グループ編成、グループ協議

- 七生地域外の先生方が参加してくださったことで七生の冊子の活用方法について、議論が活発化したと感じた。
- 地域ごとに分かれていたので、研究を行いやすいグループ編成だった。

- 今年度のような形でよいと思うが、授業者の負担を軽減するためにも授業の検討の時間を確保する必要があると感じた。
⇒小学校全校から1名ずつ募集する。グループ編成はさらに良い方法があるか考える。指導案検討をどのような方法で行うかを令和2年度に向けて考える。

研究会場

- 旭が丘小が会議の中心になったのは、学校によっては毎回来ることが大変だったのではないかと思う。
- 定例会に参加できない（おくれてくる）委員が多いように感じた。市内全域から委員が集まる以上は、交通の便を考慮し開催場所（時間）を決めてほしい。
⇒会場までの所要時間を考えて、遅れないように出発する。

研究会参加者

- 研究授業においては、委員ではなく一般の教員の参加を促さないと、郷土教育の広まりが弱いと感じる。（担当グループは参加、他のグループは学校から別の教員を参加する等）
⇒委員以外の教員に研究授業への参観を呼びかける。

研究テーマ

- 課題が不明確で、分かりづらかった。
⇒研究が目指すものを委員全員が共有できるようにする。
⇒研究副主題の表現を具体的なものにする。

その他

- 活用方法を考え、それを授業にするとかなりの時間と労力が必要となる。
この事業に力を注げる教員は、学校の仕事のいくらかを免除される必要があるように思う。
⇒所属長の判断に任せる。
- 今回、郷土教育推進委員会に初めて参加させていただいた。郷土教育推進研究委員になるにあたり、これまでの実践の資料や冊子などがあればいただければありがたかった。何年前に誰がこんな実践を行ったという話になった時に、話についていけなかった。積み重ねるという点においても、少なくともデータをみんなが簡単に活用できる形であるといいと思った。
⇒教育センターのHPで過去の研究紀要を見ることができる。

(4) 令和2年度の研究活動

- 令和元年度の継続
- 七生の冊子を含めた市内刊行物を活用した授業実践事例の展開。
- 引き続き、七生の冊子を活用した授業を様々な学年・単元で行っていき、市内の先生方に広げていく。
- 令和元年度並みに、研究授業と実践報告がほしい。実践から学ぶ機会が多いと、活用の方法や仕方もイメージしやすい。
- 生徒による七生の冊子の活用方法を知りたいです。また、『歩こう 調べよう ふるさと七生』というタイトルなので、実際に歩いてみて何を疑問に思い、どのように調べたかを知りたいです。
⇒令和2年度も七生の冊子を活用した指導の在り方を、実践を通じて探っていく。
- 七生の冊子には載っていないもので、需要がありそうな項目はないか。
- 授業に活用できるかできないかに関わらず、郷土のことを、実体験を通して知っていくことが郷土教育を普及していくためにも必要であると思うので、これからもよい題材を探していく必要がある。
- 社会科において、3年「市の移り変わり」4年「自然災害」の単元が入る。そこに特化した地域教材を開発、七生の冊子と絡めた授業展開事例の実践をできないか。
⇒委員のアイディアも参考に、今後の改訂に向けて情報を蓄積する。
- 他校での地域人材を活用している事例の紹介。地域の教材や人材を活用した取り組みについてもっと研究したい。
⇒地域の人材を活用した実践の情報を蓄積する。
- 令和元年度は、七生地区の郷土教育について研究したが、今後は違う地区についても研究ができればと思う。
⇒七生の冊子を参考に、児童が探求的に学習する。
- 郷土というと歴史や地理的な側面が多く感じるので、生き物を取り扱ってほしい。
⇒「1 七生の豊かな自然を訪ねて」のページを入り口にして探求的な学習を展開することができないか。

Ⅳ 教育センターの活動

1 夏季研修会（平山地域のフィールドワーク）

【午前の部】見学会

郷土教育推進研究委員会では、日野市教育委員会と共催で、7月24日に平山地域の夏季研修会（フィールドワーク）を実施しました。

『歩こう 調べよう ふるさと七生』に取り上げられている「平山季重」「鮫陵源」「平山遺跡」「平山八幡神社」「平山陸稲と林丈太郎」などに関連した場所を実際に見て歩き、学芸員、ゲストティーチャー等の説明を聞きました。

見学した教員からは、「冊子に書かれていることを、実際に歩いて確認できた」、「遺跡調査の現場を実際に見るという貴重な体験ができた」とか、「地域を教材化する見通しがもてた」など、フィールドワークの成果が伺える多数の感想をいただきました。



「平山遺跡」の見学
～東京都埋蔵文化財センターの発掘調査現場



「平山八幡神社」の見学

【午後の部】研修会

午後は滝合小学校を会場として、平山遺跡に関する講演や、平山地域の教材化についての講義を皆で聞き、今後の授業に活かせる学びを深めました。



講師は大石絵里子学芸員

〔研修会の内容〕

- ①会場校長の挨拶（加藤敏行校長）
- ②フィールドワークを振り返って（清野）
- ③平山遺跡の古墳群（大石絵里子学芸員）
- ④平山地域の教材化（小杉博司顧問）
- ⑤グループ別研究及び報告
- ⑥講評
- ⑦郷土教育推進研究委員会委員長の挨拶
（猿田恵一校長）
- ⑧事務連絡

2 若手教員（一年次）育成研修への協力

教育委員会が10月10日（木）に実施した若手教員（1年次）育成研修会への協力をしました。主題は「JR中央線開業130周年と日野煉瓦 ～なぜ！日野駅が誘致できたか？～」とし、日野の歴史を自らが歩き、感じ、子供たちへどのように伝えるかを皆で考えました。

参加した若手教員からは、「初めて知る日野人が地域に残した足跡に感動した」「日野市の教師として児童・生徒にどのように郷土の授業を指導するか考えたい」などの感想が聞かれました。

〔研修の内容〕

- ・ 講義；タイトル「JR中央線開業130周年と日野煉瓦 ～なぜ！日野駅が誘致できたか？～」。
- ・ 内容；①日野の地勢、②甲武鉄道の二つのルート、③日野煉瓦工場、④日野駅の誘致、⑤多摩地域の近代化の礎を築く。
- ・ 見学ルート；①一中ポケットパーク→②桑ハウス→③多摩川鉄橋→④日野用水下堰→⑤日野用水上堰→⑥山下堀（みずほ銀行前：煉瓦の説明板）→⑦飯縄権現社



一中のポケットパーク



多摩川鉄橋



日野用水上堰



山下堀



飯綱権現社

3 平山陸稻の栽培体験

平山の林丈太郎が発見・改良した陸稻（おかぼ）とは何か、水稻栽培の稲との違いは何かを確認する栽培体験を、小林和男 JA 東京みなみ組合長をゲストティーチャーに迎え教育センター内で行いました。

初夏に田植えを行い、酷暑を乗り切り、実りの秋には「わかば教室」の子供たちと鳥よけの案山子を作成し、取り付けをしました。また、刈り取った稲の天日干しを行い、「脱穀」「粳摺り」「精米」を行い、取れたお米の食べ比べを子供たちと行いました。

〔栽培体験の状況〕



6月6日 田植え



7月19日 順調に生育



8月23日 たわわに実る



10月11日 稲刈り
上が平山陸稻（ノギが長い）



12月9日 千歯こきで脱穀



12月12日 精米、試食

4 農業振興課との連携

広く市民の皆さんに「平山陸稻」を知っていただくために、『平山陸稻（おかぼ）を知ってますか!!』のパネル（4枚）を作成し、展示を行いました。展示会場は2か所で、①JA 東京みなみの農産物直売所「みなみの恵み」、②セツ塚ファーマーズセンターです。パネル展を継続開催しております。



JA 東京みなみ「みなみの恵み」のパネル展示風景



東光寺ファーマーズセンターでの
パネル展示作業

5 1課4館との連携（七生の冊子を活用して）

1課4館とは、生涯学習課、郷土資料館、図書館、中央公民館、新選組のふるさと歴史館で、郷土教育推進研究委員会に委員として参加しています。

今年度は、1課4館の共催で、『歩こう 調べよう ふるさと七生』を使ったまち歩きを、市民の方々を対象として行いました。



経筒が出土した仁王塚にて（7月）



高幡不動尊で学芸員の説明を聞く（10月）

講座は、生涯学習 学びの場プロジェクト「歩こう・調べよう・ふるさと七生～春夏秋冬・七生を学ぶ～」として4回開催しました。

春編（6月）「ほどくぼ小僧 藤蔵とかくれ穴」、夏編（7月）「初夏の真慈悲寺と百草画荘」、秋編（10月）「高幡界限一今・昔」、冬編（11月）「平山季重と平山遺跡」をテーマにして市民の皆さんと散策しました。

〔参加者の感想〕

「日野に長く暮らしているが、初めて知ったことがたくさんあって、参加してよかった。」

「（現在の）A4判を持って歩けるようなブックレット判にして、有償で頒布したらどうか。」 など、いろいろなお声をいただきました。

〔今後〕

「令和2年度も継続して行う予定でいます。」との、力強い1課4館の決意がありました。

1課4館の日頃の郷土への取り組みを紹介して、利活用していただくための宣伝を行っていただいた。

① 生涯学習課；幕田学芸員

「縄文人の生活を体感しよう ～七ツ塚遺跡を例として～」

② 図書館；山口司書

「冊子『歩こう 調べよう ふるさと七生』図書館ホームページにおける活用実践 ～【こどものページ】〈としょかんクイズ〉〈しらべよう！ひの〉への活用～」

③ 中央公民館；佐藤館長

「1課4館共催事業の参加者の声から」

④ 郷土資料館；白川学芸員

「ふるさと日野を伝える郷土資料館」

郷土資料館；秦学芸員

「見つけよう！『東京オリンピック記念植樹』の碑」

⑤ 新選組のふるさと歴史館；高橋学芸員

「新選組のふるさと歴史館での小・中学校向けの取り組みについて」

縄文人の生活を体感しよう～七ツ塚遺跡を例として～

授業のねらい

埋蔵文化財発掘調査で出土した遺物（土器・石器・木製品等）や、検出された遺構（住居跡・工房跡・古墳・掘立柱建物跡・溝跡等）の情報を活用して、児童が、日野市で発掘調査された遺跡から当時の人々がどのように暮らしていたかを考えることで、大昔の日野について興味をもち、現代の生活との違いや共通点などを学ぶ。

授業の概要

（授業例として、日野市第三小学校で行った土器を使った学習“大昔の生活の話”を取り上げる）

◇ 準備

- ・ 平成 30 年度に行なわれた七ツ塚遺跡発掘調査で発見された縄文時代の住居の規模を、ブルーシートに描き、中央に実寸大写真パネルを置いて炉を再現することで、縄文時代の住居のスケールを体感できるようにした。
- ・ 出土した縄文土器や石器を準備して、児童が実際に触れられるようにし、縄文時代の衣食住を考えるきっかけをつくろうとした。

◇ 授業風景

- ・ 日野市七ツ塚遺跡の地理的特徴を説明し、縄文時代の住居はどのような様子であったか印象を聞いた。
- ・ 縄文時代の住居跡をイメージできるように、七ツ塚遺跡以外の復元住居の写真をパネルで紹介し、調査から推測される住居の構造について説明した。
- ・ 体育館にブルーシート（縄文時代の住居の形・柱穴・炉を描いたもの）を敷き、薄い段ボールを住居跡に沿って廻らし、住居の壁を造ることで地面を掘りこんだ形状であったことを伝えた。
- ・ 段ボールの高さが当時の地面の高さを表現しており、住居内に居るときの雰囲気を経験してもらった。
- ・ 一つの住居にどれほどの人数が収まるか考えさせてから、実際に出入り口から住居内へ入り、住居の広さを体験するようにした。
- ・ 児童が住居中央に置いた炉のパネル（実物大）を取り囲むように集まったのが印象的であった。炉にはどのような役割があるかと問いかけ、「台所・暖房器具・家族が集まる場所」な



縄文住居を再現



写真パネルで説明

ど様々な反応があった。

住居のスケールを体感した後は、発掘調査で出土した縄文土器を机に並べ、実際に触ってもらった。過去の七ツ塚遺跡発掘調査で出土したほぼ完形の縄文土器をひとつ用意し、周りに並べた土器の破片を観察してもらい土器のどの部分に該当するかなど、パズルを当てはめるようにして土器の特徴を考える時間を設けた。土器の破片をよく観察することで、完形であったらどのような形状をしているか、また大きさや厚みなどを想像してもらい、どのように土器が作られたかを考えるきっかけをつくることができた。生徒の中には胎土の特徴（キラキラしている石が含まれている等）などに興味を示す場合もあった。

石器についても同様に机に並べ手に取ってもらい、重さや形状を知ってもらった。石皿とすり石を用意し、木の実などをすりつぶすため利用していたことを伝えた。実際に手に取ってもらうことで、土器や石器を作った当時の人々の存在を少しでも身近に感じられるよう工夫した。



土器を観察する児童

◇ 『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用

日野市七生地域に存在する平山遺跡では、縄文時代に限らず弥生・古墳時代から奈良・平安時代、中世、近世にわたり多くの遺跡が確認されている。縄文住居の場合、炉石（実物）を使って炉を再現する過程で重さや運び方を考えることができ、石器を時代順に並べ現代のものへどう移り変わっていったかという道具の変遷を知ることでもある。弥生・古墳時代であれば方形周溝墓や古墳が発見されており、住居で見つかる遺物とどのように異なり、どのような特徴があるのか等考えることで当時の人々の墓についての扱いを知ることができる。奈良・平安時代の住居跡も多く確認されており、縄文時代の住居との違いを考えることで、時代ごとの暮らしの変化を知ることができる。

発掘調査で発見された遺構・遺物の規模を体感できるものを用意することで、発掘調査の現場にいらなくても、写真や文字等のみで伝えるよりイメージし易い授業となると感じた。

『歩こう 調べよう ふるさと七生』を手に市内の遺跡を訪ねたり、掲載されている遺物写真の実物を見ることで、新しい驚きや発見が生まれることが期待される。七生地域に限らず、日野市内の遺跡を巡る機会となることで、大昔の日野について興味を深めてもらえると考えている。

冊子『歩こう 調べよう ふるさと七生』図書館ホームページにおける活用実践 ～【こどものページ】〈としょかんクイズ〉〈しらべよう！ひの〉への活用～

図書館は郷土に関する資料や情報を蓄積し、提供する機能・役割を担っている。

平成31年（2019）1月にホームページをリニューアルし、子供向けページを新設した。リニューアル当時、【こどものページ】内〈しらべよう！ひの〉については、日野市に関する調べ学習の支援をコンセプトに、掲載内容を検討中であった。

そこで、図書館所蔵の資料を通して、ふるさと日野への興味・関心や、より深い学びへとつなげるための取り組みとして、図書館ホームページにおける『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用を考えた。

1 図書館ホームページ【こどものページ】

子供向けページの新設にあたり、以下の7項目を設定した。このうち、(3)(4)について、『歩こう 調べよう ふるさと七生』の活用を考えた。

- (1) ほんをさがす
…蔵書検索
- (2) としょかんのつかいかた
…図書館の利用案内
- (3) しらべよう！ひの
…日野市に関する調べ学習支援
- (4) としょかんクイズ
…日野市や図書館に関するクイズ
- (5) ほんのさがしかた
…資料の請求記号、分類について案内
- (6) おすすめのほん
…各テーマのおすすめ本一覧
- (7) としょかんのひみつ
…図書館の歴史、仕事について案内



【こどものページ】トップ画面

2 〈としょかんクイズ〉〈しらべよう！ひの〉への活用

(1) 〈としょかんクイズ〉への活用



〈としょかんクイズ〉画面

〈としょかんクイズ〉では、日野市や図書館に関する4択のクイズがランダムに出題される。ホームページのリニューアル当初より、「異聖歌」や「ほどくぼ小僧」など郷土に関するテーマを取り入れていた。今後は、『歩こう 調べよう ふるさと七生』で取り上げられたテーマも活用し、定期的に問題を入れ替える形で更新していく。

(2) 〈しらべよう！ひの〉への活用

Q. 日野市に伝わる生まれ変わりのでんせつといえは？

こたえは【ほどくぼ小僧】です。

日野市に伝わる「勝五郎生まれ変わり物語」は、江戸時代に本当に起こった勝五郎の生まれ変わりをめぐる出来事です。程久保村（日野市程久保）に生まれ、六歳で亡くなった勝五郎という少年が、中野村（八王子市東中野）の勝五郎という少年に生まれ変わったというこの物語は、主人公が実在することがはっきりしており、場所や日時も正確であるという点でたいへんめずらしい物語だと言われています。

～参考にした資料～

- ★『歩こう 調べよう ふるさと七生』日野市教育委員会 2020年 p.24-25
- ★『ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語』葉内隆子／絵 日野市郷土資料館／文 2016年
- ★『ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語』葉内隆子／絵 日野市郷土資料館／文 2009年
- ★『生まれ変わりレストラン』かとうみこ／絵 豊心社 2003年 p.80-90
- 『ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語』日野市郷土資料館ブックレット11
- 『ほどくぼ小僧 勝五郎生まれ変わり物語』(DVD) 日野市郷土資料館／制作著作、勝五郎生まれ変わり物語探究調査団／制作著作、葉内隆子／原画 2009年

～日野市のでんせつや昔話についてもっと知りたいなら～

- ★『とんとんむかし 語ろう！八王子のむかし話』尾崎山とんとんむかし語り部の会／編 日野市 2016年
- 日野市の昔話もいくつかのっています。
- ★『日野のむかし話』日野第6小学校5年3組／著 日野第6小学校 1991年
- 『新編日野物語』日野徳見寛／編 日野徳見寛 2018年

※ ★がついているのは子ども（小学校中学年程度）向けの資料です。

発行：日野市立図書館 令和2年2月
電話：042-586-0584
ホームページ：https://www.lib.city.hino.lg.jp/

ホームページに添付している PDF データ

〈しらべよう！ひの〉では、〈としょかんクイズ〉で出題される問題の中からいくつかを取り上げ、クイズの答えと解説・関連資料の紹介を掲載する。令和元年（2019）12月より図書館に関する問題、令和2年（2020）3月より郷土に関する問題の掲載を開始した。

郷土に関する問題は、一般向けページ内〈日野市についてよくある質問（レファレンス事例集）〉を参考に、歴史・民俗・自然・産業にジャンル分けして掲載した。ページ構成や内容について利用対象を小学校中学年程度とし、『歩こう 調べよう ふるさと七生』に取り上げられているテーマは、関連資料の紹介部分に情報を記載することで活用を試みた。クイズの答えと解説・関連資料の紹介部分は、プリントアウトしても利用できるよう PDF データを添付する形式を採用している。また、子供向けの資料に印をつけるなど、子供たちにとって手に取りやすい資料を紹介するよう工夫した。

今後は、順次掲載する問題を追加し、図書館所蔵の資料を通した日野市の郷土に関する調べ学習の支援に継続して取り組んでいきたい。

（中央図書館 山口 裕衣）

(1) 「生涯学習 学び場プロジェクトを総括して」 中央公民館長 佐藤 早苗

■目的

教育委員会副読本「歩こう 調べよう ふるさと七生」を活用し、四季折々、七生地区の歴史と自然を「歩いて、見て、語って、聞く」学びの場を、生涯学習部門一課三館の合同事業として実施する。

■年間プログラム

	日 程	集合場所	参加人数	テ ー マ
春	6月15日(土)	高幡図書館	20名	ほどくぼ小僧 「藤蔵」と「かくれ穴」
夏	7月20日(土)	百草図書館	21名	初夏の真慈悲寺と百草画荘
秋	10月19日(土)	高幡図書館	19名	高幡界隈一今・昔
冬	11月9日(土)	平山図書館	23名	平山季重と平山遺跡

■アンケートからの意見（一部抜粋）

① 副読本「歩こう 調べよう ふるさと七生」について

- ・写真中心だが、要点がまとめられており、歩いて訪ねてみたくなる。
- ・地元（地域）の歴史がより理解できる。
- ・冊子を活用して、街並みをウォーキングをしたいと思った。
- ・日野に長く住んでいても、知らないことがたくさんあることに気づいた。
- ・冊子とともに現地を歩くことで、記載されていたことがさらに膨らんだ。

② 参加動機

- ・地域の歴史に関心があったから
- ・まちを歩くのが好き
- ・副読本の内容に興味があった

■総括

- ・生涯学習部門 1 課 3 館が合同で取り組んだ事業として初めて試みであった。各部署の強みを生かしながら、定期的に会合をもち全体を組み立て実施した。冊子の活用から始まったが、「歴史」というキーワードでは同じ顔ぶれの参加者が集まってしまい、日野市の歴史を深堀するのか、日野にある地域資源を広く市民に知ってもらい、参加型でいっしょに学ぶ場とするのか、など課題があがった。学び場プロジェクト実施にあたっては、各部署に負担がかからないよう、年間でも3回から4回が理想である。
- ・市民の満足度は、高いと感じた。この街歩きを機に、「もっと日野を知りたい→学びたい」を実現できる機会として、定例開催を継続していく。

今後として

- ・地域資源として、「歴史」「自然」「人」などいろいろなジャンルでの学びの場を、企画・検討をしていきたい。
- ・アンケートからのキーワード
稲作・養蚕、八王子城と平山、鮫陵源の経営者鮫島氏、南平・平山の地層、七生村の歴史、多摩丘陵ハイキング、そのほか、アンケートにおいて多数あり。

ふるさと日野を伝える郷土資料館

郷土資料館 白川未来

1 ふるさと日野を伝える郷土資料館の役割

日野市郷土資料館は、日野の歴史・民俗・自然などに関して調査し、資料を収集するなどの活動を行っている。学校教育の場で活用できる資料も数多く、児童・生徒が実物資料に出会う機会を提供している。

2 郷土資料館の利用例

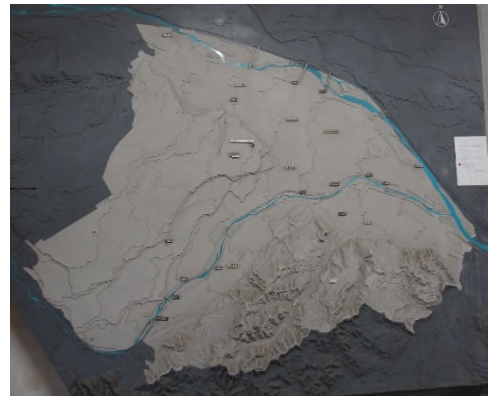
郷土資料館は学校の教育活動にどんなことで役立てるのかを、平成 30 年度、令和元年度の事例を中心に紹介する。

(1) 社会科見学などの展示見学

社会科見学の一環として、3 年生がバスにて来館する場合が多くある。学年単位での来館は、小学生が中心である。特別支援学校の中・高生の来館事例もあり、オーダーメイドで本物体験を提供する。

① 日野市の地形コーナー

5m 毎の等高線が引かれた模型では、日野の地形の特徴が分かる。社会科見学のコース、日野市の境界、地形を作った川などの自然の力、丘陵地域の開発、鉄道や道路及び遺跡の位置、地形と日野の人々の暮らしや歴史との関わり等を伝えることができる。



② 企画展示室

年 3 回、テーマを変えて展示を開催している。学校からの見学が集中する秋季には、昔の道具に関する展示を開催してきた。時期により展示内容が異なるので、スケジュールは毎年発行の事業案内や、ホームページを参照いただきたい。

③ 民俗収蔵展示室

昔の暮らしの道具を展示し、電気に頼らずに暮らしていた時代の暮らしの道具などを紹介している。川漁の道具、養蚕など、学校の所在地域によって紹介したいテーマがあれば、重点的に説明させていただくことができる。

④ 自然収蔵展示室

日野で見られる野鳥、昆虫、植物などを写真や標本で紹介している。また、およそ 150 万年前のヒノクジラやアケボノゾウの牙や足跡、貝などの化石も展示している。

⑤ 体育館など別会場での体験的な学習

体育館では、唐箕を回したり、肥桶を担いだりするなどの農具体験を行い、日野の農業や米作りについて学ぶことができる。

特別支援学校の来館時に、植物の民間薬づくりを体験したり、剥製を手で触れてみたりといった体験を実施したこともある。

(2) 地域を調べる学習

中学生はグループで地域調べに来館する。展示室にて資料を紹介しながら、質問に答えるほか、テーマによっては石碑や遺跡の現場で解説をしたこともある。夏季休業時の宿題で調べに来る児童・生徒もいる。答えを教えるだけでなく、調べ方や市内の観察場所などを紹介する

ことも大事にしている。他市の中学校からの来館もあった。

(3) 資料の貸し出し

昔の生活道具や化石標本、国語の教科書に登場する糸車や動物の剥製などを貸し出す。各教科で活用できる。

(4) 出張授業や出張展示など

- ① 学校や野外に出向いて解説を行う。どんぐりなどの木の実や縄文土器や昔の生活道具を教室に持っていったり、火起こしの道具などを持ち込んで体験的な活動を実施したりする。日野で起きた過去の災害から地域を学ぶことができる。説明のためのパワーポイントや火山灰の実物を準備している。



- ② 出張展示

「巽聖歌」や「豊田の昔」など、写真と解説の入った展示パネルを期間限定で展示することができる。学校公開日も含めてパネル展を行うという利用があった。

- ③ その他、朝礼で『勝五郎生まれ変わり物語』の話をするということも実施した。

(5) 職場体験や職場訪問

中学生が来館

- ① 郷土資料館での職場体験では、展示物の整備や資料整理などを体験する。
- ② 資料館の仕事について、インタビューに答える。

(6) その他

授業に使える資料の提供の他、先生方の提案に合わせて、柔軟に対応することができる。

日野市史の活用

3 郷土資料館の見学などの手続きについて

具体的な方法は、校長会や校務支援システムなどでお伝えしている。

(1) 最初のお申し出はお早めにお電話で

- ① 実施時期や候補日が決まったら、お早目にご連絡を。
希望する時期が集中するので、ゆとりをもってお申し出いただきたい。
直前のお申込みの場合は、希望内容の沿った対応が難しくなることがある。
- ② 日時が確定したら書面での申し込みをしていただく。
- ③ 下見や内容調整も合わせてしていただくとよい。

(2) 連絡調整の方法はご都合に合わせて

内容調整にあたっては、電話、ファックス、校務支援システム C4th メール、E メール、交換便などご都合に合わせて活用します。

日野市郷土資料館 問い合わせ先・開館状況

電 話：042-592-0981 FAX：042-594-1915

開館時間：9：00～17：00

休館日：月曜日（祝日の場合は、祝日を開館しその翌日）、年末年始

E-mail museum@city.hino.lg.jp

郷土資料館 見つけよう！「東京オリンピック記念植樹」の碑

1964年（昭和39）の東京オリンピックに伴い、日野市で記念植樹をしたことを示す碑が各所に残されています。しかし、その全貌はよくわかっていません。

記念碑は高さ146cm（うち50cm程が地中に埋まっている）、12cm四方のコンクリート製の角柱で、先がとがっています。正面には「（日野市マーク）東京オリンピック記念植樹」、裏面には「昭和三十九年十月 日野市」とあり、文字の一部に赤い彩色が残っているものがあることから、当初は文字が赤く塗ってあったと考えられます。現在、（日野本町）飯縄権現と生活保健センター、（豊田）第一豊田荘と豊田公園、（川辺堀之内）川辺堀之内研修所、（日野台）日野台公園と緑ヶ丘公園、（西平山）山王社、（程久保）神明社、（高幡）JA東京みなみ本店などに残されています。

この春、親子でお散歩しながら、オリンピック記念碑を探してみたいはいかがでしょうか？また、記念碑建設の経緯や植樹された木についての情報をお持ちの方は、ぜひ郷土資料館（592-0981）までご一報ください。



碑の表面（豊田：第一豊田荘）



碑の裏面（日野本町：飯縄権現）



JA東京みなみ本店（高幡）にある記念植樹碑。東京オリンピック2020大会に合わせて、文字を赤く塗り直した。

(2)「新選組のふるさと歴史館での小・中学生向けの取り組みについて」

新選組のふるさと歴史館 高橋秀之

毎年夏に開催の小・中学生向け展示

新選組のふるさと歴史館では、1 年間に 3 回程度、企画展・特別展を開催している。その内、小・中学生の夏休み期間にあたる 7～9 月には、「新選組ってなんだろう？」というテーマを掲げ、小・中学生向けの展示を開催している。これは平成 26 年（2014 年）度からスタートしたもので、「新選組」という性格上、大人向けの企画展を開催していたが、「新選組のふるさと日野」として、未来を担う「ひのっ子」たちにも、ぜひ新選組のことを知ってもらいたいということで、始めた企画展である。

展示の特徴としては、解説文などの文字パネルにはすべての漢字にルビをふり、平易な文章になるように努めている。また、夏休みの自由研究の材料になるように、展示されている解説文をプリントにしたものやメモなどができる「散策マップ」など、「お土産」として持ち帰ることができるプリント類も配布している。

しかし、平易なパネルやプリント配布だけではなかなか展示自体を見てもらえないことが多く、子どもたちに対して、展示を見てもらうのは難しく、博物館でよくある「興味がないため、あっという間に展示を見てしまい、滞在時間が少ない」という課題があった。



夏休み期間中に開催する小・中学生向け展示の様子

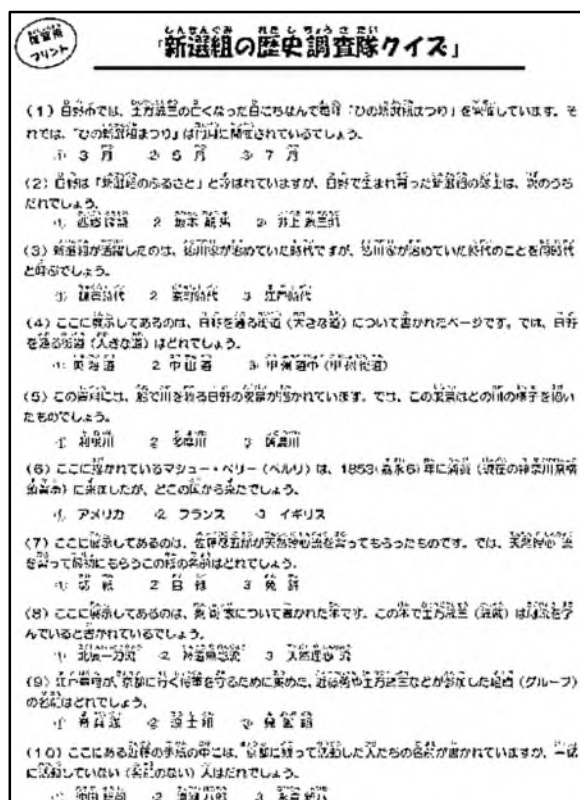
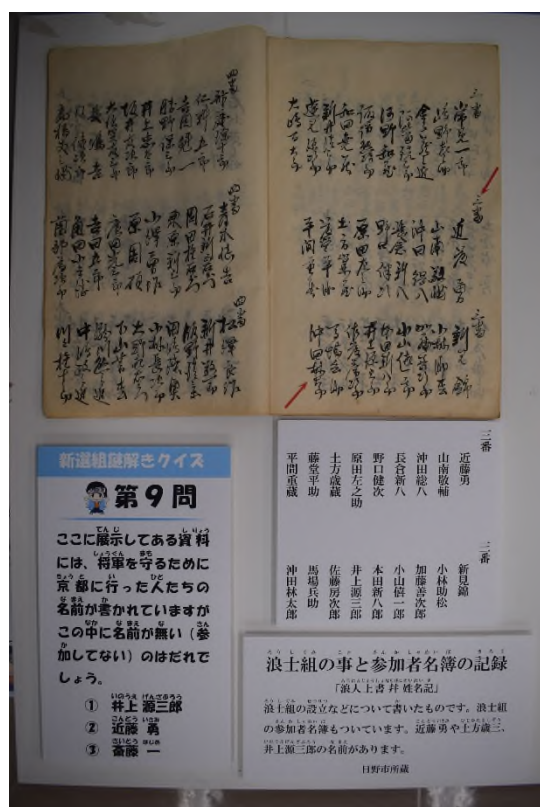
「20 問のクイズに挑戦」は 9 割の子どもが参加

子どもたちに展示をじっくり見てもらうための手法として、夏休みの子供向けの展示では、展示室の中にクイズを用意し、解説文や展示資料の中から答えのヒントを見つけてもらう「クイズに挑戦」というイベントを実施している。その結果、子どもたちはクイズという「ゲーム」があるため、積極的に挑戦し、全問正解を目指して、しっかり解説文を読み、展示資料をじっくり見るという状況が生まれた。その結果、集計をとると来館した小・中学生の約 9 割以上がクイズに挑戦していた。この「クイズ」という手法は、思わぬ影響があり、当初は小・中学生限定で実施していたが、アンケートなどから、大人もクイズをやりたいという声もあり、平成 29 年度からは全員参加できる形にしている。その結果、大人も 8 割程度クイズを解いていることがわかり、大人にとっても、わかりやすく面白い展示となっていることがうかがえる。

「クイズ」は 3 択式で問題数は 20 問（1 問 5 点の 100 点満点想定）用意した。当初は 20 問では問題数が多すぎて挑戦してもらえないかと不安であったが、前述のとおり 9 割近くの子どもたちが挑戦し、ほぼ全員が全問正解で景品（シール）をもらって喜ぶ姿が見られる。

家族で来館されている方々を見ていると、大人が子どもに対して、解説パネルを読んであげ、答えのヒントとなるところを誘導してあげるなど、展示を通して会話や交流が行われている光景をよく見かける。クイズがあることによって、来館者が会話をしながら展示をじっくり見てもらえる状況が生まれているのは企画者としてはうれしい限りである。

また、アンケートには「クイズがあって楽しかった」「勉強になった」「面白かった」という子どもたちの声があると同時に、保護者からも「クイズがあって、子どもが集中して取り組んでいた」「子どもが楽しくやっていた」「大人も勉強になった」という声が多くみられた。やはり、なにかしらの「目標」があると、それに対して取り組むため、「クイズ」という手法は効果が大きいと感じた。また、クイズを解くため、小さな展示室だが、滞在時間も長くなっている。



クイズの展示風景と過去のクイズ（一部）

「薬研」などを使う「昔の薬づくり」イベント

夏休みの子供向けの展示の関連イベントとして、「昔の薬づくり体験」も毎年開催している。これは新選組副長だった土方歳三の生家、土方家が製造していた家伝薬の「石田散薬」を作ってみるというイベントで、ミゾソバという植物を焙烙で煎り、薬研を使って細かくして「薬」をつくるというイベントである。当然、過程を体験するものであり、実際の薬を作るものではないが、昔の道具である「薬研」を使って細かくする作業や折り紙みたいな感じで薬包



「石田散薬」(左)と材料のミゾソバ(右)

紙をつくるなど、子どもたちも楽しみながら作業をして、黙々と取り組む人気のイベントである。アンケートでは、「薬研であんなに細かくなって驚いた」や「薬包紙の折り方が難しかった」など、昔の道具や生活の知恵というところで満足度が高いようである。

実際に木刀を使って学ぶ「天然理心流体験」イベント

「昔の薬づくり体験」と同様に、夏の企画展のイベントとして「天然理心流体験」も行っている。これは、新選組局長の近藤勇をはじめ、土方歳三、沖田総司、井上源三郎などの多摩出身の新選組隊士たちが習得していた剣術「天然理心流」が現代まで受け継がれており、日野市内で活動している方々を講師として、子どもたちに実際の剣術の「形」を教えてもらうイベントである。現代の剣道のように防具をつけて竹刀で打ち合うのではなく、木刀で形稽古を行うスタイルで実施するが、子どもたちは、最初は戸惑いながらもぎこちなく木刀を振っているが、だんだん慣れてくるとうまくできる子がほとんどである。夏休み期間中は、展示だけではなく、体を使って体験できるイベントを複数、実施している。なお、このイベントでは、実際の「真剣（切れる刀）」を使った演武も披露するので、子供だけでなく、大人にも評判となっている。



天然理心流体験イベントの様子

市内にある新選組ゆかりの場所

市内には、子孫が個人で運営している資料館が3館ある。日野市石田にある「土方歳三資料館」、日野市日野本町にある「井上源三郎資料館」と「佐藤彦五郎新選組資料館」である。これらの館は、個人で運営しているため、普段は第一・第三日曜日の午後のみの開館となっている。それぞれの館には新選組ゆかりの資料が多く所蔵されており、実際に使っていたものが展示されているので、ぜひ、機会があれば見学していただきたい。

また高幡不動尊は、土方歳三の菩提寺であり、近藤勇や土方歳三の事績を記した「殉節両雄之碑」や土方歳三の銅像もある。奥殿（宝物殿）には、ゆかりの資料も展示してある。また、土方歳三の命日5月11日にちなんで、毎年5月には、日野駅と高幡不動駅周辺で「ひの新選組まつり」が開催され、多くの観光客が訪れる。



高幡不動尊にある土方の銅像

新選組のふるさと歴史館と日野宿本陣を活用

アニメやゲーム、漫画などには、「新選組」をモチーフにした作品が多くある。2004

年には三谷幸喜脚本の NHK 大河ドラマ「新選組！」が放映され、2020 年 5 月には、土方歳三を描いた司馬遼太郎の小説「燃えよ剣」の映画が公開予定など、「新選組」は歴史物の中では人気が高く、よく使用される。しかし、小・中学生の教科書では、坂本龍馬は取り上げられているが、新選組は本文中には記載されていない。

現在、日野市教育委員会では、市内小学生に新選組の副読本として「ひのっ子新選組探検隊 ～歩こう調べよう ふるさと日野～」を配布している。6年生の社会（歴史）や総合的な学習などで、新選組を取り上げたい、使って何かをしたいがどうしたらよいかという際は、ぜひ、新選組のふるさと歴史館に出張授業や団体見学などご相談いただきたい。また、新選組だけではなく、日野の江戸時代のことや甲州街道（甲州道中）についても、当館を活用していただきたい。

また、日野宿本陣（日野市日野本町）は、江戸時代に建てられた建物を実際に見ることができる。向かいの日野宿交流館の2階には、江戸時代の日野のジオラマや鮎漁の道具、昭和の工場についてなどの展示コーナーもある。昔の道具を授業で使いたい、出張授業をしてもらいたいなどがあれば、気軽に新選組のふるさと歴史館（042-583-5100）か日野市郷土資料館（042-592-0981）にご相談いただきたい。なお、市内の小・中学校が教育目的で見学される場合、新選組のふるさと歴史館・日野宿本陣は入館料が免除となる。



日野宿交流館にある江戸時代の日野宿のジオラマ



江戸時代に建てられた日野宿本陣



【日野駅周辺散策マップ】

- ③ 宝泉寺
井上源三郎の墓がある。
- ④ 八坂神社
近藤勇・沖田総司の名前が書かれた奉納額がある。
※実物の公開は、年2回だけ
- ⑤ 新選組のふるさと歴史館
開館時間：9時30分～17時
休館日：毎週月曜日
（祝日の場合は翌平日）

V 令和元年度；活動の成果と課題

〔活動の成果〕

- 1 冊子を活用した授業を工夫し、多様な実践事例を創ることができた。
- 2 冊子の内容にふれることを通じて、児童の郷土に対する親しみや関心が高まることが分かった。
- 3 フィールドワークによって、教員の冊子の内容理解が深まり、授業づくりの見通しがもてた。

〔今後の課題〕

- 1 冊子を活用した探究的な授業の開発を行い、広める。
- 2 市内の郷土関係機関や人材と連携した授業の研究。

郷土教育への期待

日野市教育委員会 指導主事 上国料 一志

私が郷土教育の活動で最も意義深く感じた活動は、市内を実際に歩くフィールドワークです。なぜなら、私は「様々な課題について体験から学ぶこと」、また、「学んだことを体験で確認する」という経験は、「日野市 未来に向けた学びと育ちの基本構想」にある、「わくわく」そのものであると感じたからです。

急速に国際化や情報化が進む中、子供たちが地域での生活体験の中で疑問をもち課題解決を図る機会は多くはありません。体験する機会が少ないのであれば、一つ一つの体験をより深める必要があります。そのためには、子供たちの経験を大人が認めて、価値づけることが大切です。私は、教員が地域のフィールドワークを経験することで、子供の体験をより一層共感的に価値づけすることができると思います。

私は、今年度教員を対象としたフィールドワークに2つ参加させていただきました。参加者は、いつもの景色の中に歴史や必然性があることにとても感動していました。特に、初任者や日野にこられて間もない先生方は目を輝かされていました。生まれ育った土地で採用される先生は決して多くはありません。だからこそ、子供と同じような新鮮な感動があり、同じ目線で対話をするきっかけともなるのではないかと感じました。また、この経験はぜひ保護者をはじめ地域の方々にもしていただきたいとも思いました。

令和元年度の郷土教育推進研究委員会は、平成30年度作成した『歩こう 調べよう ふるさと 七生』の授業での活用をテーマに活動しました。委員の先生方は教科にかかわらず創意工夫をこらしていました。子供たちは、題材を自分が住んでいる地域に当てはめて考え、より身近に具体的に感じることができました。これは、地域を学ぶための優れた教材を研究開発してきた一つの成果です。

今、持続可能な社会の実現に向け、「SDGs（持続可能な開発目標）」が世界規模で示されています。このような活動に対し、具体的な行動をするためには身近な地域を深く知ることはとても大切です。世界に羽ばたくひのっ子を育成する上でも、郷土教育の推進は大きな意味があります。

子供たちがより郷土について体験的に、実感をもって学んでいけるような教材の開発が行われるとともに、教員への研修等についても研究が進むことで、より多くの「わくわく」が広がります。この「わくわく」がこれからの時代を生きる子供たちの大きな力になると信じています。

《教育長のコラム》
～郷土教育の風～

“ふるさと”には先人たちが、心を込めて生きてきた証があります。私たちがその“ふるさと”の一番大切なものに出会って、これからどのような“ふるさと”を次の人へ伝えていくかを追求することが、生きていく証でもあります。

ふるさと日野の歴史や自然が織りなす郷土（文化）には、日野人の「先進性」と「柔軟性」が垣間見られます。私たちはこの日野文化の風を感じ、ふるさとの一員として一歩また一歩と前進していきましょう。
教育長 米田 裕治

編集後記

郷土教育推進研究委員会副委員長
(日野市立旭が丘小学校副校長)
秋田 克己

日野市には学びに有効な材を多く有しています。しかしながら、旧七生村地域についての資料は多くを焼失しているため、教材化が難しいとされていました。平成30年度に小冊子『歩こう 調べよう ふるさと七生』を編纂したところ秀逸な資料としてまとめ、市民のみなさまにも好評を博すこととなりました。

今年度は子供たちが「ふるさと七生」への親しみや関心が高まることを目指して、授業等への活用を進めてまいりました。当初、七生から遠い学校でうまく役立てることができかどうか心配もありました。各小学校から選出された郷土教育推進研究委員の創意工夫により、子供たちが「七生も同じ“ひの”」という意識で向き合うことができたことは大きな成果でした。また、生涯学習課、郷土資料館、図書館、中央公民館、新選組のふるさと歴史館の1課4館が市民への紹介を進めました。お読みになったからも新しい情報を提供してくださり、内容に磨きをかけた第2版を刊行する運びとなりました。多くのみなさまに育てられて成長していると感じています。今後、子供たちが地域を築いた人々の働きや自然の豊かさに視点をむけ、取り上げられた場所に自ら進んで訪ねていくことを期待しています。そして、これからも子供たちを初めとして市民のみなさまにとって「わくわくする学びの手引」として今後も活用されていくことを願っています。

結びに、小冊子の編纂・改訂に関わられた資料提供者のみなさま、授業づくりに協力いただいた多くのみなさまに感謝申し上げます。

令和元年度（2019 年度）

郷土教育推進研究報告書

「郷土日野」指導事例 第 14 集

発行日 令和 2 年（2020 年）3 月 31 日

発 行 日野市立教育センター
郷土教育推進研究委員会

歩こう 調べよう ふるさと七生

(第2版)



日野市教育委員会

日野市立 小学校 なまえ